

青森県埋蔵文化財調査報告書 第648集

林ノ後遺跡

—国道 279 号横浜北バイパス道路改築事業に伴う遺跡発掘調査報告—

2025年3月

青森県教育委員会

序

青森県教育委員会及び青森県埋蔵文化財調査センターでは、令和4年度及び令和5年度に国道279号横浜北バイパス道路改築事業予定地内に所在する林ノ後遺跡の発掘調査を実施しました。

西に陸奥湾、北に釜臥山を望む丘の上に位置する本遺跡は発掘調査の結果、土坑や溝状土坑などの遺構が見つかり、縄文時代の生活域や狩猟場であることが分かりました。また、古代以降の人々の行動痕跡も確認することができました。

本報告書は、それらの調査に係る成果をまとめたものです。この成果が今後、埋蔵文化財の保護のために広く活用され、また、地域の歴史を理解する一助となることを期待します。

最後に、日頃から埋蔵文化財の保護に対して御理解をいただいている青森県土整備部道路課に厚く御礼申し上げるとともに、発掘調査の実施と調査報告書の作成に当たり、御指導、御協力をいただきました横浜町教育委員会をはじめとする関係各位に対し、心から感謝申し上げます。

令和7年3月

青森県埋蔵文化財調査センター

所 長 渡 部 泰 雄

例 言・凡 例

- 1 本書は、青森県県土整備部道路課（以下、事業者）による国道279号横浜バイパス道路改築事業に伴い、青森県教育庁文化財保護課が令和4年度、青森県埋蔵文化財調査センターが令和5年度に発掘調査を実施した、横浜町林ノ後遺跡の発掘調査報告書である。発掘調査の対象面積は9,000㎡、発掘面積は6,889㎡である。
- 2 林ノ後遺跡の所在地は青森県上北郡横浜町字林ノ後地内、字中根名本地内、青森県遺跡番号は、406031である。
- 3 発掘調査と整理・報告書作成の経費は、事業者が負担した。
- 4 発掘調査から整理・報告書作成までの期間は、以下のとおりである。

発掘調査期間	令和4年6月1日～同年7月29日
	令和5年9月1日～同年10月13日
整理・報告書作成期間	令和4年8月1日～令和5年3月31日
	令和6年4月1日～令和7年3月31日
- 5 本書は、青森県埋蔵文化財調査センターが編集し、青森県教育委員会が発行した。執筆と編集は報告書記載の編集者が担当し、文末に執筆者名を記した。依頼原稿については、文頭に執筆者名を記した。
- 6 発掘調査から整理・報告書作成に当たり、以下の業務については委託により実施した。

水準点・基準点測量	株式会社	知立造園 CUBIC 事業部青森営業所
遺構測量の一部	株式会社	知立造園 CUBIC 事業部青森営業所
放射性炭素年代（AMS測定）	株式会社	加速器分析研究所
遺物の写真撮影	有限会社	無限
遺物写真の切り抜き	株式会社	知立造園 CUBIC 事業部青森営業所
- 7 遺跡周辺の地形・地質の原稿執筆は島口天調査員（青森県立郷土館副館長）に依頼した。
- 8 石器の石質鑑定は根本直樹調査員（国立大学法人弘前大学大学院理工学研究科講師）に依頼した。
- 9 発掘調査成果の一部は、ホームページ、発掘フェア等において公表しているが、これらと本書の内容が異なる場合は、正式報告として刊行する本書がこれらに優先する。
- 10 発掘調査及び整理・報告書作成における出土品、実測図及び写真は、現在、青森県埋蔵文化財調査センターが保管している。
- 11 本書に掲載した遺跡位置図は、国土地理院発行の25,000分の1地形図「陸奥横浜」・「有畑」を複写・加工して使用した。
- 12 測量原点の座標値は、世界測地系（JGD2011）に基づく平面直角座標X系による。
- 13 挿入図の方位は、すべて世界測地系（JGD2011）の座標北を示している。
- 14 全体図等の縮尺は、原則として路線図・調査対象範囲図は1/2,000、遺構配置図は1/600とし、各挿入図毎にスケール等を示した。
- 15 遺構については、検出順に、その種類を示す略号と通し番号を付した。遺構に使用した略号は以下のとおりである
 SKー土坑、SVー溝状土坑、SDー溝跡

- 16 遺構実測図の土層断面図等には、水準点を基にした海拔標高を付した。
17 遺構実測図の縮尺は土坑・溝状土坑・溝跡を1/60とし、各挿図毎にスケール等を示した。
18 遺構実測図に使用した網掛けの指示は、以下のとおりである。



遺構実測図：被熱・焼土範囲

- 19 基本土層の層序番号にはローマ数字を、遺構内堆積土の層序番号には算用数字を使用した。
20 基本土層・遺構内堆積土の色調表記等には小山正忠・竹原英雄（2011）『新版標準土色帖』を使用した。
21 遺物については、取り上げ順に、その種類を示す通し番号を付した。遺物と火山灰に使用した略号は、以下のとおりである。

P－土器、S－石器、F－鉄滓・鉄製品、C－炭化物、B-Tm－白頭山－苦小牧火山灰

- 22 遺物実測図の個別番号は、1から通し番号を付した。
23 遺物実測図の縮尺は1/2・1/3を原則とし、各挿図毎にスケールを示した。
24 遺物実測図に使用した網掛けの指示は、以下のとおりである。



礫石器：磨面範囲

陶磁器：軸葉範囲

- 25 石器等の計測値は、長さ×幅×厚さ（cm）・重さ（g）の順に表記したが、（ ）内の数値は現存値である。
26 遺物写真の各番号は、原則として遺物図版と共通番号を付した。
27 遺物写真の縮尺は不同である。
28 鉄製品のX線透過写真撮影はYXLON社製の「Cougar EVO」で行った。
29 発掘調査及び整理・報告書作成に際し、下記の機関等から御協力、御指導を得た（敬称略）。

横浜町教育委員会、宮内勝巳

目 次

序	第4節 出土遺物	25
例 言・凡 例	1 礫石器・礫	25
目 次	2 鉄滓	25
挿図目次・表目次・写真図版目次	3 陶磁器	25
第1章 調査の経過	4 鉄製品	25
第1節 調査に至る経緯	第4章 自然科学分析	27
第2節 発掘調査の経過と方法	第1節 放射性炭素年代(AMS測定)	27
第3節 整理等作業の経過と方法	第5章 総括	30
第2章 遺跡の位置と環境	第1節 遺構と遺物から見た	
第1節 地理及び歴史的環境	各時代の土地利用	30
第2節 遺跡周辺の地形・地質	1 縄文時代	30
第3章 調査の成果	2 古代	30
第1節 概要	3 中世	30
第2節 基本土層	4 近世以降	31
第3節 検出遺構	5 土地利用の様相	31
1 土坑	引用・参考文献	31
2 溝状土坑	計測・観察表	32
3 溝跡	写真図版	33
	報告書抄録	41

挿図目次

図1 路線図・調査対象範囲図	図7 土坑(2)	19
図2 遺跡の位置と周辺の遺跡	図8 溝状土坑(1)	22
図3 林ノ後遺跡周辺の段丘区分図	図9 溝状土坑(2)	23
図4 基本土層	図10 溝跡	24
図5 遺構配置図	図11 出土遺物	26
図6 土坑(1)		

表目次

表1 林ノ後遺跡と周辺の遺跡一覧	表5 礫石器・礫観察表	32
表2 土坑(SK)計測表	表6 陶磁器観察表	32
表3 溝状土坑(SV)計測表	表7 鉄滓・鉄製品観察表	32
表4 溝跡(SD)計測表		

写真図版目次

写真1 遺跡全景	写真5 土坑(3)・溝状土坑(1)	37
写真2 基本土層	写真6 溝状土坑(2)	38
写真3 土坑(1)	写真7 溝状土坑(3)・溝跡	39
写真4 土坑(2)	写真8 出土遺物	40

第1章 調査の経過

第1節 調査に至る経緯

国道279号横浜北バイパス道路改築事業予定地内に所在する埋蔵文化財の取扱いについては、青森県県土整備部道路課及び上北地域県民局地域整備部（以下「事業者」）と青森県教育庁文化財保護課（以下「文化財保護課」）が平成25年度から継続的に協議及び現地確認を行っており、状況が整い次第、文化財保護課が試掘・確認調査を実施してきた。令和3年度に行われた試掘・確認調査の結果、複数のトレンチから遺構が確認されたことにより周知の埋蔵文化財包蔵地の新規登録（林ノ後遺跡）が行われた。

この結果を受け、再度事業者と文化財保護課との間で協議を行い、事業地内での遺跡の現状保存が困難であることから、令和4年度は文化財保護課が、令和5年度は青森県埋蔵文化財調査センターがそれぞれ調査を行うこととなった。

文化財保護法第94条第1項による土木工事等のための発掘調査に関する通知は、上北地域県民局長から令和3年10月29日付け上県局整備第1247号で提出され、これを受けて工事着手前の発掘調査の実施が、青森県教育委員会教育長から令和3年11月9日付け青教文第1037号で通知されている。

なお、本事業ではこれまでに、本遺跡の他、林ノ脇遺跡の発掘調査が行われ、『林ノ脇遺跡』（青森県教育委員会2021）、『林ノ脇遺跡Ⅱ』（青森県教育委員会2023）の2冊の報告書が刊行されている。

（葛城）

第2節 発掘調査の経過と方法

1 発掘調査体制と経過

発掘調査の体制は以下のとおりである。

令和4年度

調査主体 青森県教育庁文化財保護課

課長	稲葉 克徳
課長代理	今泉 武寿
埋蔵文化財GM	葛城 和徳
文化財保護主幹	岩田 安之
文化財保護主査	荒谷 伸郎
文化財保護主査	最上 法聖
文化財保護主査	濱松 優介

令和5年度

調査主体 青森県埋蔵文化財調査センター

所長	渡部 泰雄
総務GM	佐藤 真理

調査第一GM 鈴木 和子
文化財保護主幹 笹森 一郎
文化財保護主査 中門 亮太
文化財保護主事 長谷川 大旗

専門的事項に関する指導・助言

調査員 宇部 則保 八戸市埋蔵文化財センターは川縄文館発掘専門員（考古学）
調査員 島口 天 青森県立郷土館学芸課長（地質学）

令和4年度

令和4年度の発掘調査は、調査対象面積を6,000㎡として令和4年6月1日から同年7月29日までの期間で行った。発掘作業の経過、業務委託状況等は以下のとおりである。

6月1日～ 発掘調査器材等を現地へ搬入し発掘調査を開始した。測量基準点・水準点を業者に委託して設置し、これに基づいて4×4m単位のグリッドを設定した。また、調査区枠の測量も委託により行った。

6月中～下旬 遺構測量を行った。遺構検出、遺構精査、遺物取り上げ作業を行った。

7月上～中旬 遺構測量を行った。遺構検出、遺構精査を継続した。

7月下旬 遺構測量を行った。全景写真撮影を行った。発掘調査器材等の片付け、清掃を行った。

7月29日 発掘調査器材・出土遺物等を搬出し、すべての作業を終了した。

令和5年度

令和5年度の発掘調査は、調査対象面積を3,000㎡として令和5年9月1日から同年10月13日までの期間で行った。発掘作業の経過、業務委託状況等は以下のとおりである。

9月1日～ 発掘調査器材等を現地へ搬入し発掘調査を開始した。調査基準点については令和4年度調査時に設置した基準点に基づいて4×4m単位のグリッドを踏襲して設定した。水準点については令和4年度に設置した水準点に基づき調査区内に適宜設置した。

9月上旬 遺構検出を行った。遺構や遺物数が当初の予想を下回りそうのため、調査期間を短縮することとなった。

9月中～下旬 遺構検出、遺構精査を行った。

10月上旬～ 遺構精査を継続した。

10月12日 発掘調査器材等の片付け、清掃を行った。

10月13日 発掘調査器材・出土遺物等を搬出し、すべての作業を終了した。

2 発掘調査の方法

令和4年度

令和4年度の発掘調査は、令和3年度に文化財保護課が実施した試掘・確認調査により縄文時代の遺構が確認されているため、その結果を受けて示された遺跡内での調査区、工事用センター杭No.81～89間の内、No.83～87の区間で行うこととなり、遺構・遺物の検出に主眼をおいた調査方法を採用した。

【測量基準点・水準点・グリッド設定】調査対象区域内に標準の座標と標高を備えた20m間隔の実測基準点（方位を合わせた一边20mの方眼点）を測量業者に委託して設置し、これを基準として4×4mのグリッドを設定した。

各グリッドは南から北方向にローマ数字（Ⅱ～Ⅳ）とアルファベット（A～Y）を、西から東方向に算用数字「36～56」を付し、その組み合わせで表し、グリッドの名称は南西隅で代表させた。原点（ⅡX-36）は平面直角座標値X系のX=120708、Y=35644とした。

【基本土層】基本土層は、試掘・確認調査の結果を踏まえ、周辺地形の状況も把握できるよう調査区西部の壁面で観察し、上位から順に第Ⅰ層、第Ⅱ層、第Ⅲ層、第Ⅳ層、第Ⅴ層までローマ数字を付した。

【表土等の調査】表土の除去作業は、令和3年度の試掘・確認調査により、表土から縄文時代の遺構確認面までは遺物が希薄であることが判明したので、重機を使用して掘削の省力化を図った。出土した遺物については適宜グリッド毎・層位毎に取り上げた。

【遺構の調査】検出遺構は原則として確認順に種類別の番号を付して精査した。堆積土層観察用のセクションベルトは、遺構の形態、大きさ等に応じて適宜設定した。遺構内の堆積土層には算用数字を付けて、ローマ数字を付けた基本土層と区別した。

遺構図や遺構配置図の作成は委託で実施し、トータルステーションによる測量で得た3次元座標データを基に、(株)CUBIC製「遺構実測支援システム」を用いて作図した。

【写真撮影】35mmモノクローム、35mmカラーリバーサルの各フィルムカメラ及び約2,620万画素のフルサイズデジタル一眼レフカメラを併用し、遺構の検出・精査状況、完掘後の全景等を記録した。

令和5年度

令和5年度の発掘調査は、令和3年度に行われた文化財保護課の試掘・確認調査の結果を受けて示された遺跡内の調査区、工事用センター杭No.81～89間の内、No.87～89の区間で行うこととなり、令和4年度同様、遺構・遺物の検出に主眼をおいて進めることとした。

【測量基準点・水準杭の設置・グリッド設定】遺構測量等に用いた測量基準点は、令和4年度に設置した基準点及び水準点を令和5年度調査区に移動して用いた。基準点からの測量に支障が生じた場合、調査区内の任意点に座標を移動して使用した。調査グリッドは令和4年度調査時に設定したものを踏襲した。今回使用したグリッドは南～北方向へ「ⅢS～ⅣC」、西～東方向へ「37～54」を付し、その組み合わせで表し、名称は南西隅で代表させた。

【基本土層】基本土層は、令和3年度の試掘・確認調査及び令和4年度の発掘調査の結果を踏まえ、周辺地形の状況も把握できるよう調査区東部の壁面及びその内側で観察し、上位から順に第Ⅰ層、第Ⅱ層、第Ⅲ層、第Ⅳ層、第Ⅴ層までローマ数字を付した。

【表土等の調査】表土の除去作業は、令和4年度同様、試掘・確認調査の結果を踏まえ、一部では重機を利用して掘削の省力化を図った。調査で出土した遺物については、適宜グリッド毎・層位毎に取り上げた。

【遺構の調査】遺構の検出は、主に基本土層の第Ⅱ～Ⅳ層で行った。検出遺構は原則として確認順に番号を付して精査し、堆積土層観察用のセクションベルトは遺構の形態や大きさ等に応じて適宜設定した。遺構の平面図、堆積土層断面図、遺構配置図は(株)CUBIC製「遺構実測支援システム」とトータルステーションを用いて作図した。

【写真撮影】35mmモノクローム、35mmカラーリバーサルの各フィルムカメラ及び約2,620万画素のフルサイズデジタル一眼レフカメラ、約1,605万画素のコンパクトデジタルカメラを使用し、遺構の検出・精査状況、完掘後の全景等を記録した。

第3節 整理等作業の経過と方法

1 整理等作業の体制と経過

整理・報告書作成の体制は以下のとおりである。

令和4年度

整理主体 青森県教育庁文化財保護課

課長	稲葉 克徳
課長代理	今泉 武寿
埋蔵文化財GM	葛城 和徳
文化財保護主幹	岩田 安之
文化財保護主査	荒谷 伸郎
文化財保護主査	最上 法聖
文化財保護主査	濱松 優介

令和6年度

整理主体 青森県埋蔵文化財調査センター

所長	渡部 泰雄
総務GM	猪股 幸康
調査第一GM	葛城 和徳
文化財保護主幹	笹森 一朗

専門的事項に関する指導・助言

調査員	宇部 則保	八戸市埋蔵文化財センター是川縄文館発掘専門員（考古学）
調査員	島口 天	青森県立郷土館副館長（地質学）

令和6年度

令和4年度の整理・報告書作成作業は令和4年8月1日から令和5年3月31日までの期間で行った。整理・報告書作成作業の経過は以下のとおりである。

8月～ 写真の整理作業を行った。

9～12月 遺構図面の修正作業を行った。

1～3月 遺構図の作成作業を行った。

令和6年度

令和6年度の整理・報告書作成作業は令和6年4月1日から令和7年3月31日までの期間で行った。整理・報告書作成作業の経過は以下のとおりである。

4月～ 出土遺物の計測作業を行った。また、写真の整理作業を行った。

5～6月 出土遺物の図化作業を行った。

- 7～8月 遺構図面の修正作業を行った。併行して掲載遺物の写真撮影を行った。
- 9月～ 遺構図面の調整作業を行った。また、遺構図面のトレース作業を開始した。
- 10月～ 遺構図版及び遺構写真図版作成作業を開始した。
- 11月～ 各種図版作成作業及び報告書掲載遺物観察表の作成を開始した。また、これまでの調査成果を検討し報告書の原稿作成を開始した。
- 12～1月 遺物写真図版を作成した。また、原稿・版下が揃ったので報告書の割り付け・編集作業、印刷業者の選定、契約事務が完了した後、原稿及び版下を入稿した。
- 2月～ 校正及び出土遺物・記録類の整理を行った。
- 3月12日 3回の校正を経て、報告書を刊行した。
- 3月下旬 記録類、出土遺物等を整理して収納した。

2 整理等作業の方法

2か年にわたる発掘調査では縄文時代と思われる土坑8基、溝状土坑7基、近世以降と思われる土坑2基、溝跡1条の遺構を検出し、石器、鉄滓や陶磁器片等、段ボール箱換算で1箱の遺物が出土した。林ノ後遺跡は縄文時代を主体とした遺跡であることを踏まえ、整理作業の工程を計画した。報告書の内容については遺構や遺物の特徴、調査段階や、その後の所見を検討して記載することとした。

【図面類の整理】遺構は、(株)CUBIC製「遺構実測支援システム」で作成した平面図と堆積土の土層断面図の調整を行った。図面の測量点等については、エクセルファイル(.xlsx形式及び.csv形式)でハードディスク及び長期保存用ブルーレイディスクに保存した。

【写真類の整理】令和4年度のカラーリバーサルフィルムはアルバムファイルに整理収納した。35mmモノクロームフィルムと令和5年度のカラーリバーサルフィルムは撮影日順にネガアルバムに、デジタル写真はファイル名を撮影内容・方向に変更し、遺構毎及び検出遺構順に整理した。長期保存用写真データは、RAWデータをデジタル現像して変更した非圧縮Tiffデータ・RAWデータ・Jpegデータを、メモ写真はJpegデータをハードディスク及び長期保存用ブルーレイディスクに保存した。

【遺物の洗浄・注記と接合・復元】洗浄後の遺物の注記は、調査年度、遺跡名、グリッド、出土層位を略記した。直接注記できないものは、収納したチェック付きポリ袋に記載した。接合・復元個体は無かった。

【報告書掲載遺物の選別】遺物は時代・時期・種別毎に分類したうえで、それぞれの特徴を良く表す資料を主として選別した。

【遺物の観察・図化】資料は表面を十分に観察した上で、それぞれの特徴を適切に分かり易く表現するように図化した。また、遺物台帳・観察表を作成した。鉄製品については、埋蔵文化財調査センター所有器材を使い撮影したX線透過写真により内部構造を観察した。

【遺物の写真撮影】業者に委託して行ったが、実測図等では表現しがたい質感・雰囲気・製作技法等を伝えられるように留意した。

【自然科学分析】遺構が造られ、また、廃絶された時期を推定するため、堆積土中の炭化物の放射性炭素年代測定を業者に委託した。

【遺構・遺物のトレース、写真図版、版下作成】遺構・遺物の実測図やその他挿図のトレースは、(株)CUBIC製「遺構実測支援システム」とAdobe社製「Illustrator」を用いた。拓本の切り抜きはAdobe

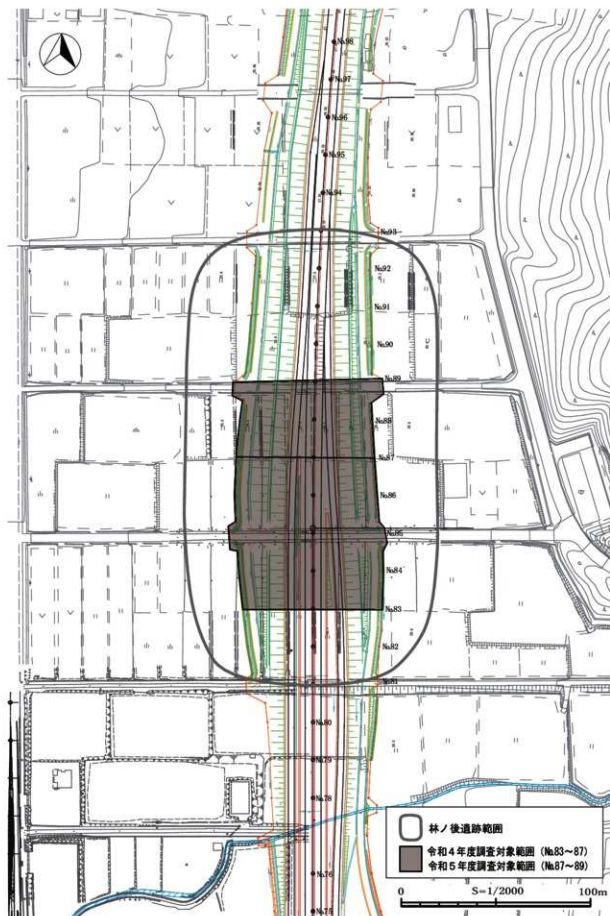


図1 路線図・調査対象範囲図

社製「Photoshop」、図版の版下作成は Adobe 社製「Illustrator」・「InDesign」を用いた。遺物写真の切り抜き作業は委託により行った。

【遺構の検討・分類・整理】遺構毎に種類・構造的特徴に関するデータを整理し、構築時期や同時性・性格等について検討を加えた。併せて遺構計測表を作成した。

【遺物の検討・分類・整理】遺物を時代・時期・種類毎に整理し出土状況・特徴を検討した。

【調査成果の検討】遺構・遺物の検討結果を踏まえて、縄文時代の生活域や狩猟場、古代以降の土地利用状況について検討・整理した。

【遺物の収納】遺物は報告書掲載名を基に収納した。

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理及び歴史的環境

林ノ後遺跡は、下北半島頭部のほぼ中央、JR大湊線陸奥横浜駅から東方約700mに位置する。西流して陸奥湾に注ぐ南の三保川と北の田ノ沢川に挟まれた段丘上に立地し、標高は約26～29mを測る。調査区を含む一帯は東から西及び北から南に向かい緩やかに傾斜しており、現況は圃場整備され水田耕作に利用されている。遺跡の所在する横浜町は、北がむつ市、南が野辺地町、東は東通村と六ヶ所村に接し、西は陸奥湾に面している。南北に長い海岸線には現在、北から鶏沢・源氏ヶ浦・横浜・百目木の4か所に漁港があり、農林業の他、水産業も町の主要産業の一つとなっている。日本有数の作付面積を誇る菜の花栽培と、主要な海産物の中でもホタテ・なまこ、また、それらの加工品が著名で町の特産品にもなっている。町の幹線道路で、野辺地町からむつ市へと続く国道279号は、野辺地～横浜間が国土交通省の日本風景街道「黄花草の東むつ湾ルート」に選定され、沿岸部に自生するキングサリーやハマナス等、四季折々の自然美や農漁村風景にあふれている。町西側の海岸沿いに集落が点在し、それらを繋ぐように国道279号が縦走する。バイパスを除く国道279号は近世街道の田名部道を、ほぼ踏襲しており、江戸時代から変わらない景観を今も残しているところも多い。現在、沿岸で見ることができる松林は明治以降の植林によるものであるが、旅人が往き来した応時を偲ぶものがある。町内には、国指定の重要無形民俗文化財・国選択の記録作成等の措置を講ずべき無形民俗文化財である「下北の能舞」や県無形民俗文化財「横浜町の獅子舞」・「横浜町の神楽」、県天然記念物「横浜町のゲンジボタルおよびその生息地」、町史跡牛ノ沢遺跡（町ホームページでは牛ノ沢館跡）等が所在する。町の東側、海岸線から離れた丘陵地に展開する現在の畑地や牧草地は、大正から戦後にかけて行われた開拓によるものが多いとされている。

本遺跡及び周辺の遺跡の位置を図2に、遺跡一覧を表1に示す。本遺跡を含め吹越烏帽子山地から西側に続く標高10～100m程の段丘上や、それに接する海岸段丘にも遺跡が所在していることが確認できる。ここでは、これまでに発掘調査が行われた横浜町内の遺跡を中心に概観する。

松木遺跡は西流する松木川の右岸に所在する。昭和56年度に発掘調査が行われ、遺構は検出されていないが、縄文時代を主とした多量の遺物が出土している。時期的には縄文時代晩期を主体に後期の遺物が出土している。中でも獣面突起付きの土器やホホジロザメの歯の有孔装飾品は特筆され、町

有形文化財に指定されている。林ノ協遺跡は本遺跡の南側に位置し、西流する三保川の右岸に所在する。令和元年度と令和3年度の2度にわたる発掘調査では、屈曲を持つ堀跡に囲まれた平安時代の集落跡のほか、縄文時代早期の遺構や遺物、縄文時代の溝状土坑 51 基、弥生時代後期の遺構や遺物が見つかった。モダシ平遺跡は西流する荒内川の左岸に所在する。平成10年度の発掘調査では縄文時代のラスコ状土坑や溝状土坑1基等の遺構を検出した他、縄文時代後・晩期の土器や石器、また、弥生時代後期の土器や石器が多く出土している。百目木(3)遺跡は西流する牛ノ沢川の左岸に所在する。令和元年度の発掘調査では縄文時代の溝状土坑を18基検出し、北側斜面の落ち際に並ぶような配置が確認されている。18基中17基が調査区の北側に集中し、1基は調査区南側で検出している。吹越(2)遺跡は西流する吹越川の左岸に所在する。令和2年度の発掘調査では縄文時代の溝状土坑を10基検出し、その位置や形態が大きく二つに分かれる。北側から検出した1基は両端が大きく膨らむ特徴を持ち、長軸は西側に傾く。南側から検出した9基は長楕円形で、長軸は真北か東側に傾く特徴を持つ。その他、発掘調査は行われていないが、海岸線に近い遺跡では製塩関連の遺構が見つかり、雲雀平(4)遺跡では3基の塩釜の発見が報告されている。牛ノ沢遺跡周辺では縄文時代の独鈷石や、伊万里、唐津、志野等の陶磁器片、吹越周辺では旧石器時代終末の細石刃文化期の石器が採集されている。今後も開発行為に伴う試掘・確認調査や踏査等により横浜町の遺跡数は増えていくものと思われる。

(佐森)

表1 林ノ後遺跡と周辺の遺跡一覧

遺跡番号	遺跡名	時 代											種別	備考
		縄文	弥生	古墳	奈良	平安	中世	近世	現代	その他	その他	その他		
406001	とまり川(1)遺跡												散布地	
406002	とまり川(2)遺跡												散布地	
406003	雲雀平(1)遺跡												散布地	
406004	明神平遺跡												散布地	
406005	牛ノ沢遺跡												城跡	町史跡
406006	松本遺跡												散布地	
406007	鳥飼子平遺跡												散布地	
406008	中吹越遺跡												散布地	
406009	吹越(1)遺跡												貝塚・製塩遺跡	
406010	松空遺跡												散布地	縄文時代
406011	向武遺跡												散布地	縄文時代
406012	百目木(1)遺跡												散布地	
406013	百目木(2)遺跡												散布地・生産遺跡	
406014	荒内川(1)遺跡												散布地	
406015	荒内川(2)遺跡												散布地	
406016	荒内川(3)遺跡												散布地	
406017	横浜遺跡												散布地	
406018	林ノ後遺跡	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	散布地・貯蔵・倉庫跡	
406019	松守遺跡												散布地	
406020	太田東川遺跡												散布地	
406021	寺原敷												城跡	
406022	横浜館												城跡	
406023	雲雀平(2)遺跡												生産遺跡	市史2巻26頁
406024	雲雀平(3)遺跡												生産遺跡	市史2巻26頁
406025	松守(2)遺跡												散布地	縄文時代
406026	家ノ前川日遺跡												散布地	縄文時代
406027	モダシ平遺跡												散布地・貯蔵	
406028	雲雀平(4)遺跡												散布地・生産遺跡	
406029	百目木(3)遺跡												散布地・貯蔵	縄文時代
406030	吹越(2)遺跡												散布地・貯蔵	縄文時代
406031	林ノ後遺跡	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	散布地・貯蔵・報告遺跡	縄文時代
406032	上イタヤノ木遺跡												散布地	
406033	林ノ後遺跡												散布地	縄文時代 市史2巻26頁

●：横浜市教育委員会が調査した遺跡で、調査結果から加筆した時代。

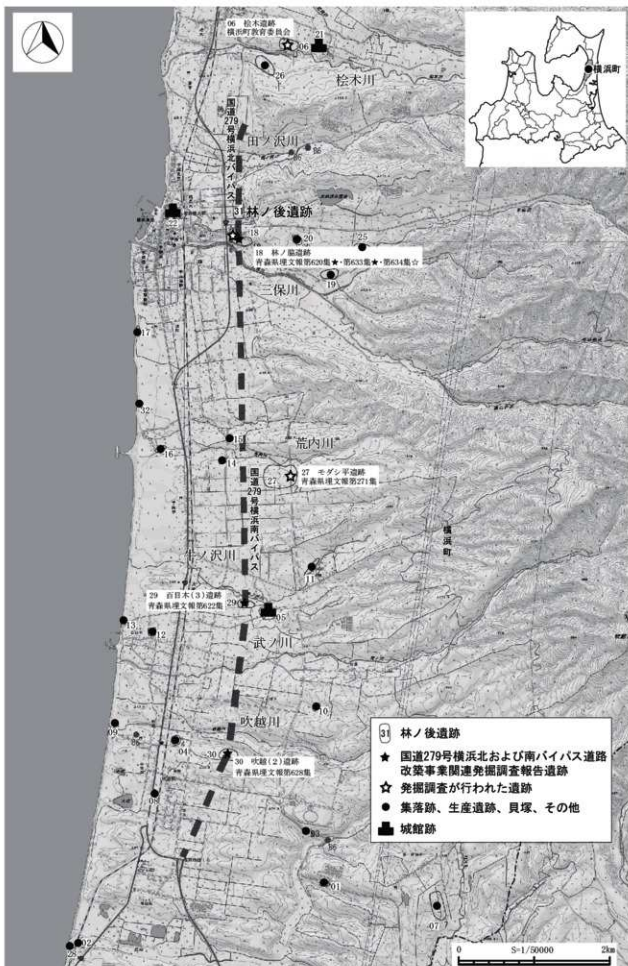


図2 遺跡の位置と周辺の遺跡

第2節 遺跡周辺の地形・地質

青森県立郷土館 島口 天

林ノ後遺跡は、上北郡横浜町の町役場東方約1kmに位置する。横浜町は西側に陸奥湾、東側に吹越烏帽子（標高507.8m）などで代表される標高500m前後の吹越烏帽子山地が南北方向に連なり、その間に広がる丘陵や台地を中心とした平坦地に集落が形成されている。

横浜町周辺の地形について、水野・堀田（1970）を引用・補足して述べる。町東側に連なる吹越烏帽子山地を取り巻くように西へ南側には吹越烏帽子丘陵が広がるが、開析のあまり進んでいない丘陵地であるため傾斜が緩やかで、谷密度もそれほど大きくない。さらにこの丘陵を取り巻くように西へ南西側には横浜台地が広がり、三保川以南では台地の西側海岸線沿いに海岸低地が、牛ノ沢川以南では台地と海岸低地の間に吹越砂丘地が分布する。横浜台地は、標高の高い順に5面の段丘面が区分されている。

本地域の段丘区分については、段丘面の形成年代と海成・河成の別を示すこと、後述のように三保川一武ノ川の間で高位の段丘面区分が難しいことを示すため、水野・堀田（1970）の区分ではなく小池・町田編（2001）に従い図3を作成した。次に、図3に示した段丘区分について述べる。

横浜町吹越から松木までの間には、南北に延びる陸奥湾岸沿いに海成段丘面mT5c,eが東西幅1～1.5kmで連続して分布している。この段丘面を吹越川などの河川が、東西方向に横切るように陸奥湾に注いでいる。mT5c,eは最終間氷期（酸素同位体ステージ5c,eに形成）に形成され、およそ南北に走る国道279号・大湊線を境に西側がmT5c、東側がmT5eに分けられる。国道279号横浜バイパス道路は、およそmT5eの汀線に沿って計画されている。これらの段丘面より東側は、武ノ川左岸側以南と三保川流域以北で上位の海成段丘面及び河成段丘面の分布が大きく異なる。

武ノ川左岸側以南には、吹越烏帽子山地に向かってmT5eから連続するように海成段丘面（mT7、mT9、mT11、mT13）および河成段丘面（fT11）が分布する。一方で三保川流域以北には河成段丘面（fT5c、fT7）が分布する。武ノ川右岸側以北でmT7～mT11の分布が見られないのは、これらの段丘崖がかなり不明瞭で、段丘面を覆うテフラが欠落していることが多いため、段丘の追跡が難しいことによる。

次に、本地域の地質について工藤ほか（2021）を参考に述べると、おおよそ山地や丘陵地には前期～中期中新世の泊層が分布し、台地には後期鮮新世～前期更新世の浜田層が泊層を不整合に覆って分布する。泊層は、玄武岩～安山岩溶岩、火山砕屑岩及び貫入岩を主体とし、凝灰質砂岩、礫岩及び軽石火山礫凝灰岩を伴う。浜田層は、砂層及び泥質砂層を主体とし、泥層、礫層、軽石火山礫凝灰岩及び凝灰岩を伴う。

工藤ほか（2021）の「古期扇状地及び河川成堆積物」の説明には「山地及び丘陵の縁辺には、山地及び丘陵の堆積物が再堆積した礫、砂及び泥から構成される古期扇状地及び河川成堆積物が分布する。これは、酸素同位体ステージ5の海成段丘堆積物に覆われることからこの年代より古いと判断、あるいは推定されるもので、開析された扇状地地形や段丘地形を示し、地形面の保存は概して悪い。」とあり、武ノ川右岸側以北でmT7～mT11の分布が見られないことの理由として考えられる。

また、岩井（1970）の「火山灰岩盤」の説明には「いわゆる上位段丘として取り扱われている山麓に発達する丘陵性の台地で、段丘堆積物は全くみられず、ローム質火山灰が全面を覆っている。この

ローム質火山灰の下位は泊安山岩類（泊層）または浜田層が分布しており、これらもかなり風化が進んでいる。なお、この丘陵性の台地を刻む小谷には安山岩の亜角礫を含んだ山津波の泥流が埋積しており、岩盤の露出を殆どみることができない。（一部改変）」とあり、これも武ノ川右岸側以北で mT7～mT11 の分布が見られないことの理由として考えられる。

林ノ後遺跡の地形・地質

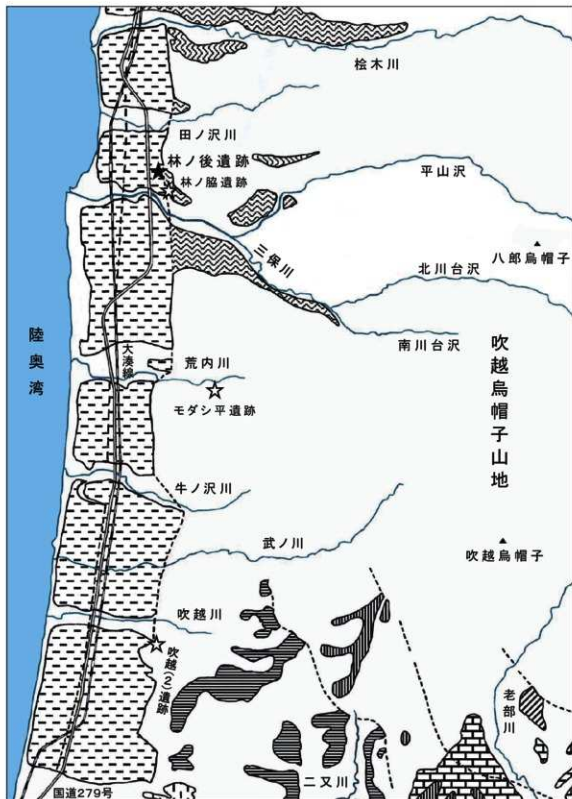
林ノ後遺跡は、三保川下流部右岸側に広がる海成段丘面 mT5e 上にある。調査区域内の標高は 25.5～28.5 m、東から西に向かって緩く傾斜している。基本土層は調査区内の東端と西端に設定され、次のように区分される。第Ⅳ層及び第Ⅴ層は最終間氷期以降に堆積したローム質土と考えられ、その上部には垂直方向にクラックが発達し、上面は風化・浸食を受ける旧表土だった時期があったと考えられる。

基本土層

- 第Ⅰ層 黒褐色土 表土。
- 第Ⅱ層 黒色土 締りがなく、褐色土をブロック状に含む。軽石粒がわずかに含まれる。
- 第Ⅲ層 暗褐色土 漸移層。軽石粒や炭化粒が微量含まれる。
- 第Ⅳ層 明褐色土 締りがあるローム質土。灰白色粘土がレンズ状に挟まれるほか、マンガン粒が微量含まれる。
- 第Ⅴ層 褐色土 固く締まるローム質土。上位の第Ⅳ層との境は明瞭で起伏があり、第Ⅳ層に突き出るような構造がみられる部分もある。このような構造は化石周水河現象のひとつである褶曲変形構造（インボリューション）である可能性が高く、最終氷期に形成されたことが考えられる。

文献

- 岩井武彦（1970）5 万分の 1 表層地質図、土地分類基本調査「陸奥横浜」、青森県、p. 20-28
- 小池一之・町田 洋編（2001）日本の海成段丘アトラス、東京大学出版会
- 工藤 崇・小松原純子・内野隆之・昆慶明・宮川歩夢（2021）20 万分の 1 地質図幅「野辺地」（第 2 版）、産業技術総合研究所 地質調査総合センター
- 水野 裕・堀田報誠（1970）5 万分の 1 地形分類図、土地分類基本調査「陸奥横浜」、青森県、p. 15-19



【凡例】海成段丘(数字は酸素同位体ステージ、破線は旧汀線)

mT5c,e mT7 mT9 mT11 mT13

※Cは西側、eは東側

河成段丘(数字は酸素同位体ステージ)

ft5c ft7 ft11

図3 林ノ後遺跡周辺の段丘区分図

第3章 調査の成果

第1節 概要

調査は工事用センター杭Na.81～89間の内、令和4年度がNa.83～87、令和5年度がNa.87～89の範囲で行った。調査区の長さは2か年で約120 m、幅は平均65 m、面積は6,889 m²である。

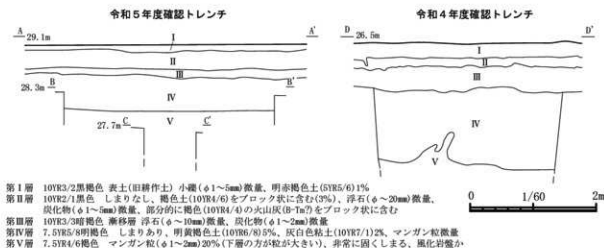
今回の調査区の地形を概観すると、遺跡東方に位置する標高520.1 mの金津山から続く丘陵の西側端部にあたり、全体的に東から西に向かい傾斜している。同じく金津山の南部を西流する平山沢の支流を堰き止めた太郎須田溜池から流れ出る小河川に向かい南にも緩やかに傾斜している。現地形での標高は約26～29 mである。

今回の事業に係る調査区からは縄文時代に属すると思われる土坑8基、溝状土坑7基、詳細不明を含む近世以降に属すると思われる土坑2基、溝跡1条の遺構を検出した。遺構の分布状況等の詳細は各遺構の報告の中でも記載しているが、土坑と溝跡は今回報告する調査区の北側、令和5年度の調査区に、溝状土坑は調査区の南側、令和4年度の調査区に集中しており、調査区中央部に空地が確認された。遺物は縄文時代の礫石器、平安時代と考えられる鉄滓や被熱礫、中世陶器片、近世以降の陶磁器片や鉄製品が出土したが、全て遺構外からである。

第2節 基本土層

基本土層については令和4年度調査区内の西側に1か所、令和5年度調査区内の東側に1か所、計2か所で観察し、位置は図5に示した。ここでは図4に基本土層を示し、各層の層相についての記載を行う。

層相は上層から第Ⅰ～Ⅴ層に区分した。令和4年度調査区と令和5年度調査区の土層観察箇所には2.6 m程の比高差があるが、第Ⅳ層と第Ⅴ層の層界と各層厚以外に大きな違いは認められない。



令和5年度確認トレンチの南側で第Ⅳ層中にφ10～20mm大の礫を含む地点あり
令和4年度確認トレンチでは第Ⅳ層と第Ⅴ層の層界は明確で起伏あり

図4 基本土層

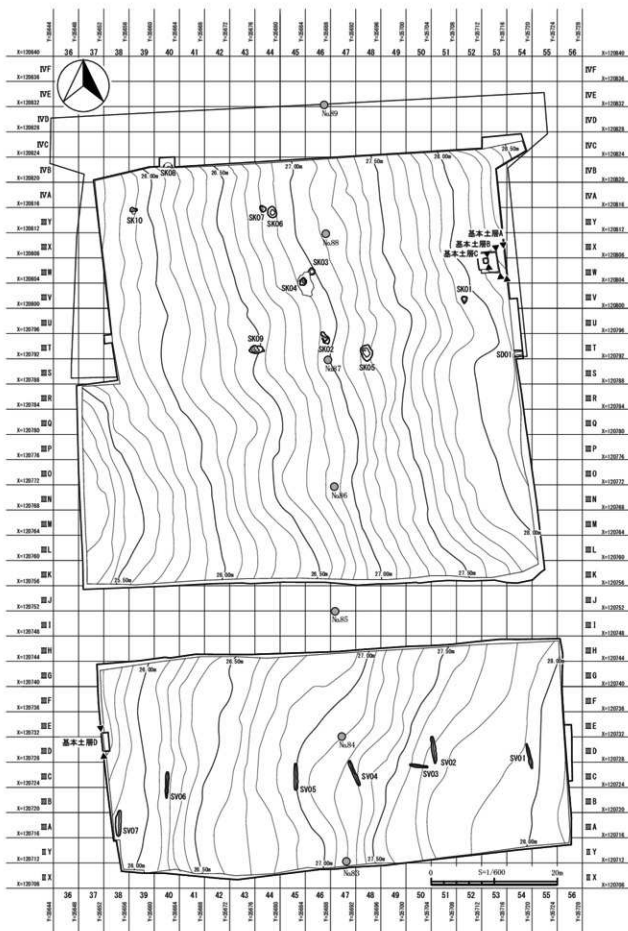


図5 遺構配置図

第3節 検出遺構

1 土坑

土坑は10基検出した。令和5年度調査区に集中している。遺構同士の重複や遺物が出土するものは確認できなかった。帰属時期は縄文時代が8基、近世以降が1基、詳細不明が1基と思われる。

第1号土坑（SK01、図6、写真3）

〔位置・確認〕 令和5年度調査区、ⅢV-52グリッドに位置する。第Ⅳ層面、標高27.9mで確認した。

〔重複〕 なし。

〔平面形・規模〕 長軸112cm、短軸84cmの不整五角形を呈する。検出面からの深さは20cmを測る。横断面形は血形状を呈している。

〔堆積土〕 2層に分層した。黒色・黒褐色土を主体とした自然堆積である。

〔出土遺物〕 遺物は出土していない。

〔小結〕 出土遺物がなく、詳細は不明である。

（中門）

第2号土坑（SK02、図6、写真3）

〔位置・確認〕 令和5年度調査区、ⅢT・ⅢU-46グリッドに位置する。第Ⅳ層面、標高26.9mで確認した。

〔重複〕 なし。

〔平面形・規模〕 不整形で長軸210cm、短軸105cm、検出面からの深さは26cmを測る。壁は全体的に急に立ち上がり底面は起伏を持ちながら中央に向かい、やや傾斜している。

〔堆積土〕 13層に分層した。にぶい黄褐色土を主体とした人為堆積の様相を呈している。

〔出土遺物〕 遺物は出土していない。

〔小結〕 堆積土の状況から縄文時代の土坑と考えられるが、出土遺物がなく、詳細は不明である。

（笹森）

第3号土坑（SK03、図6、写真3）

〔位置・確認〕 令和5年度調査区、ⅢW-46グリッドに位置する。第Ⅳ層面、標高27.0mで確認した。

〔重複〕 なし。

〔平面形・規模〕 南西隅が倒木痕と重なり長軸の規模は不明瞭。やや不整な円形を呈し、短軸は102cm、検出面からの深さは22cmを測る。底面は南側に向かい、やや傾斜している。

〔堆積土〕 4層に分層した。ロームを主体とするが、第2層中に赤褐色粒や炭化物を含んでいる。人為堆積の様相を呈している。

〔出土遺物〕 遺物は出土していない。

〔小結〕 堆積土の状況から縄文時代の土坑と考えられるが、出土遺物がなく、詳細は不明である。

（笹森）

第4号土坑（SK04、図6、写真3）

〔位置・確認〕 令和5年度調査区、ⅢV・ⅢW-45グリッドに位置する。第Ⅳ層面、標高26.9mで

確認した。倒木痕が安定した後に造られている。

〔重複〕なし。

〔平面形・規模〕不整な円形を呈している。長軸 118 cm、短軸 104 cm、検出面からの深さは 36 cm を測る。壁は、やや急に立ち上がり、底面は北東方向に向かい傾斜している。

〔堆積土〕12 層に分層した。にぶい黄褐色土を主体とした人為堆積の様相を呈している。第 6 層は全体的に被熱黒色化し、第 9・10 層には被熱した赤化土が入る。

〔出土遺物〕遺物は出土していない。

〔小結〕堆積土の状況から縄文時代の土坑と考えられる。堆積土第 3 層及び第 5 層から出土した炭化物の放射性炭素年代測定を行った結果、縄文時代草創期頃に相当する値（¹⁴C 年代は炭サンプル 1（第 3 層）が 12,410 ± 40yrBP、炭サンプル 2（第 5 層）が 12,390 ± 40yrBP）が示されており、詳細は第 4 章第 1 節に掲載している。

（笹森）

第 5 号土坑（SK05、図 6、写真 4）

〔位置・確認〕令和 5 年度調査区、Ⅲ T-48 グリッドに位置する。第 IV 層面、標高 27.2 m で確認した。

〔重複〕なし。

〔平面形・規模〕長軸 250 cm、短軸 180 cm の不整楕円形を呈する。底面は北側で一段深く掘り込まれており、検出面からの深さは最も深いところで 65 cm を測る。横断面形は逆台形状を呈している。

〔堆積土〕9 層に分層した。第 1～4 層は黒褐色～褐色土を主体とした自然堆積である。第 5 層は褐色土に黒色土が斑に混じっており、機能時の人為堆積の可能性がある。第 6～9 層は土坑の北東寄りでの堆積を確認した。第 8 層は被熱したにぶい赤褐色のローム層、第 6・9 層はにぶい黄褐色のローム層で、いずれも炭化物がわずかに混じる。

〔出土遺物〕遺物は出土していない。

〔小結〕堆積土の状況から縄文時代の土坑と考えられるが、出土遺物がなく、詳細は不明である。

（中門）

第 6 号土坑（SK06、図 7、写真 4）

〔位置・確認〕令和 5 年度調査区、Ⅲ Y-44 グリッドに位置する。第 IV 層面、標高 26.9 m で確認した。

〔重複〕なし。

〔平面形・規模〕やや不整な長円形を呈する。長軸 178 cm、短軸 138 cm、検出面からの深さは 32 cm を測る。最深部は南側に偏っている。底面は緩やかな凹凸を有し、壁は緩やかに立ち上がっている。

〔堆積土〕9 層に分層した。にぶい黄褐色ロームを主体とした人為堆積の様相を呈している。第 2・3 層には赤褐色粒を含み、第 4 層は一部被熱し変色している。

〔出土遺物〕遺物は出土していない。

〔小結〕堆積土の状況から縄文時代の土坑と考えられるが、出土遺物がなく、詳細は不明である。

（笹森）

第 7 号土坑（SK07、図 7、写真 4）

〔位置・確認〕令和 5 年度調査区、Ⅲ Y-44 グリッドに位置する。第 IV 層面、標高 26.8 m で確認した。

〔重複〕なし。

〔平面形・規模〕卵形を呈する。長軸105 cm、短軸86 cm、検出面からの深さは17 cmを測る。底面は中央に向かい、やや傾斜している。

〔堆積土〕11層に分層した。にぶい黄橙色ロームを主体とした人為堆積の様相を呈している。第4層は砂粒を多く含む被熱により変色し、色調により更に4層に細分できる。

〔出土遺物〕遺物は出土していない。

〔小結〕堆積土の状況から縄文時代の土坑と考えられるが、出土遺物がなく、詳細は不明である。

(笹森)

第8号土坑 (SK08、図7、写真4)

〔位置・確認〕令和5年度調査区、IV B-40 グリッドに位置する。調査区北壁で皿形の落ち込みを確認し、一部拡張して検出を行ったところ、第II層面、標高26.6 mで確認した。

〔重複〕なし。

〔平面形・規模〕残存最大径136 cmで、略円形を呈すると思われる。検出面からの深さは38 cmを測り、第III層中で完結する。横断面は皿形を呈している。

〔堆積土〕単層で、黒色土を主体とした自然堆積である。

〔出土遺物〕遺物は出土していない。

〔小結〕検出面から、近世以降の土坑と考えられる。

(中門)

第9号土坑 (SK09、図7、写真5)

〔位置・確認〕令和5年度調査区、III T-43・44 グリッドに位置する。第IV層面、標高26.5 mで確認した。

〔重複〕なし。

〔平面形・規模〕やや不整な長円形を呈する。長軸238 cm、短軸118 cm、検出面からの深さは23 cmを測る。底面は中央に向かい、やや傾斜している。底面中央から東側に向い緩やかに立ち上がり、テラス状の平坦面が造られる特徴を持つ。

〔堆積土〕15層に分層した。ロームを主体とした人為堆積の様相を呈している。

〔出土遺物〕遺物は出土していない。

〔小結〕堆積土の状況から縄文時代の土坑と考えられるが、出土遺物がなく、詳細は不明である。

(笹森)

第10号土坑 (SK10、図7、写真5)

〔位置・確認〕令和5年度調査区、III Y・IV A-39 グリッドに位置する。第IV層面、標高25.9 mで確認した。南側に攪乱が近接する。

〔重複〕なし。

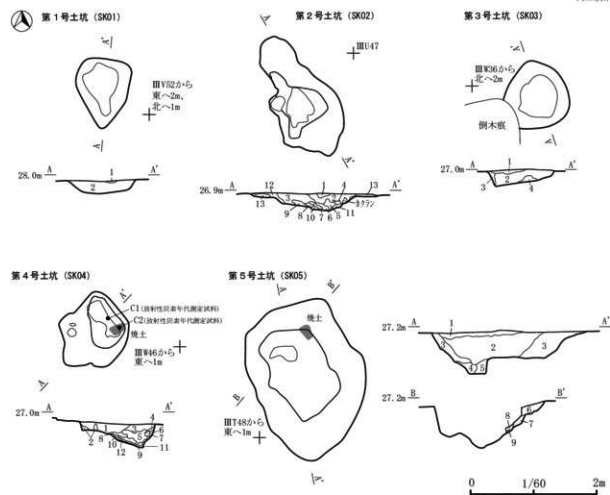
〔平面形・規模〕不整形を呈する。長軸114 cm、短軸64 cm、検出面からの深さは最深24 cmを測る。底面はほぼ平坦で西壁は底面から緩やかに立ち上がり、東壁は最深部からほぼ垂直に立ち上がっている。

〔堆積土〕6層に分層した。ロームを主体とした人為堆積の様相を呈している。第1層には炭化物を少量含んでいる。

〔出土遺物〕遺物は出土していない。

【小結】堆積土の状況から縄文時代の土坑と考えられるが、出土遺物がなく、詳細は不明である。

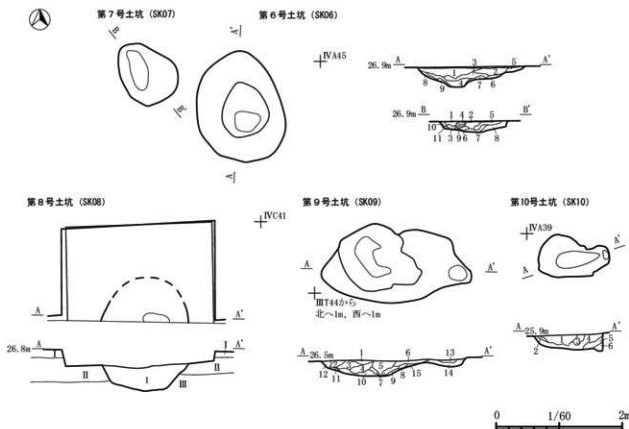
(佐藤)



- 第1号土坑 (SK01) (A-A')**
- 第1層 10TR1/7/1黒色 しまり・粘性弱
- 第2層 10TR2/3黒褐色 しまり中・粘性弱、
ロームブロック(φ<30mm)を5%
- 第2号土坑 (SK02) (A-A')**
- 第1層 10TR4/3にふい黄褐色 炭化物(φ1~2mm)微量混入
- 第2層 10TR4/2灰黄褐色 褐色(5.5TR6/6)粒(φ2~3mm)1%、
炭化物(φ2~3mm)1%
- 第3層 10TR5/2灰黄褐色 暗褐色(10TR6/8)粒(φ2~3mm)1%、
炭化物(φ3~5mm)1%
- 第4層 10TR5/2灰黄褐色 赤褐色(5TR4/6)粒20%
- 第5層 10TR5/3にふい黄褐色 明黄褐色(10TR6/8)粒(φ3~5mm)1%、
炭化物5%
- 第6層 10TR5/2灰黄褐色 赤褐色(5TR4/6)粒1%、炭化物1%
- 第7層 10TR4/1褐色 明黄褐色(10TR6/8)粒(φ1~2mm)2%、
赤褐色(5TR4/6)粒(φ1~2mm)1%、炭化物5%
- 第8層 7.5TR4/3褐色 明黄褐色(10TR6/8)粒(φ1mm)1%、
赤褐色(5TR4/6)粒(φ1~2mm)10%
- 第9層 10TR5/4にふい黄褐色 ローム主体
- 第10層 10TR4/6褐色 ローム主体 赤褐色(5TR4/6)粒(φ2~3mm)20%
- 第11層 10TR4/3にふい黄褐色 ローム主体
- 第12層 10TR5/3にふい黄褐色 ローム主体
- 第13層 10TR4/4褐色 ローム主体
- 第3号土坑 (SK03) (A-A')**
- 第1層 10TR4/3にふい黄褐色 淡黄褐色(10TR8/3)粒(φ1~2mm)2%
- 第2層 10TR5/2灰黄褐色 黄褐色(10TR5/6)粒(φ1~2mm)2%、
赤褐色(5TR4/6)粒(φ2~3mm)1%、炭化物(φ2~3mm)1%
- 第3層 10TR4/4褐色 ローム主体
- 第4層 10TR5/4にふい黄褐色 ローム主体

- 第4号土坑 (SK04) (A-A')**
- 第1層 10TR5/4にふい黄褐色 ローム主体 炭化物が互層に入る
- 第2層 10TR5/4にふい黄褐色 ローム主体 一部黒色化
- 第3層 10TR4/3にふい黄褐色 ローム主体 明黄褐色(10TR5/6)粒
(φ1~2mm)2%、炭化物(φ1~20mm)1%、炭化物(1×2cm)
サンプリング(C1 放射性炭素年代測定試料)
- 第4層 10TR5/4にふい黄褐色 ローム主体
- 第5層 10TR5/3にふい黄褐色 明黄褐色(10TR6/6)粒(φ1~2mm)2%、
赤褐色(5TR4/6)粒(φ1~2mm)1%、炭化物(φ1~10mm)1%、炭
化物(1cm)サンプリング(C2 放射性炭素年代測定試料)
- 第6層 10TR4/2灰黄褐色 全体的に被熱し黒色化(炭化物多量)
- 第7層 10TR6/4にふい黄褐色 ローム主体
- 第8層 10TR4/2灰黄褐色 ローム主体 炭化物(φ1~2mm)10%
- 第9層 10TR6/6明黄褐色 ローム主体 下部が被熱し赤化
- 第10層 10TR5/4にふい黄褐色 ローム主体 下部が被熱し赤化
- 第11層 10TR5/3にふい黄褐色 ローム主体 炭化物10%
- 第12層 10TR6/3にふい黄褐色 ローム主体
- 第5号土坑 (SK05) (A-A'・B-B')**
- 第1層 10TR2/3黒褐色 しまり・粘性弱
- 第2層 10TR3/3暗褐色 しまり・粘性中
- 第3層 10TR3/4暗褐色 粘土質 しまり・粘性やや強
- 第4層 10TR4/6褐色 粘土質 しまりやや強・粘性中、
黒色土が斑に混じる
- 第5層 10TR4/3にふい黄褐色 ローム主体 炭化物(φ1~2mm)1%
- 第6層 10TR4/6褐色 ローム主体
- 第7層 5TR4/4にふい黄褐色 炭熟ローム 炭化物(φ2mm)1%
- 第8層 10TR4/3にふい黄褐色 ローム主体 炭化物(φ1mm)2%

図6 土坑(1)



第6号土坑 (SK06) (A-A')

- 第1層 10YR4/3にぶい黄褐色 ローム主体 明黄褐色(10YR6/6)粒
($\phi 1 \sim 2\text{mm}$) 2%
- 第2層 10YR4/3にぶい黄褐色 ローム主体 赤褐色(5YR4/6)粒
($\phi 2 \sim 3\text{mm}$) 20%
- 第3層 10YR4/3にぶい黄褐色 ローム主体 赤褐色(5YR4/6)粒
($\phi 3\text{mm}$) 2%
- 第4層 10YR4/2灰黄褐色 ローム主体 一部被熱
- 第5層 10YR5/6黄褐色 ローム主体
- 第6層 10YR4/4褐色 ローム主体
- 第7層 10YR5/4にぶい黄褐色 ローム主体
- 第8層 10YR4/3にぶい黄褐色 ローム主体
- 第9層 10YR5/4にぶい黄褐色 ローム主体

第7号土坑 (SK07) (B-B')

- 第1層 10YR4/3にぶい黄褐色 ローム主体 明黄褐色(10YR6/6)粒
($\phi 2\text{mm}$) 1%
- 第2層 10YR4/2灰黄褐色 ローム主体 明黄褐色(10YR6/6)粒
($\phi 2 \sim 3\text{mm}$) 2%
- 第3層 10YR4/2灰黄褐色 ローム主体 明黄褐色(10YR7/6)粒
($\phi 1 \sim 2\text{mm}$) 1%
- 第4層 10YR6/6明黄褐色 ローム主体 砂粒を多く含む、被熱度合いに
より4層に部分
- 第5層 10YR4/3にぶい黄褐色 ローム主体 明黄褐色(10YR6/6)粒
($\phi 2\text{mm}$) 2%
- 第6層 10YR4/2灰黄褐色 ローム主体 明黄褐色(10YR6/6)粒($\phi 3\text{mm}$) 5%
- 第7層 10YR5/4にぶい黄褐色 ローム主体
- 第8層 10YR4/4褐色 ローム主体
- 第9層 10YR4/3にぶい黄褐色 ローム主体
- 第10層 10YR5/3にぶい黄褐色 ローム主体
- 第11層 10YR5/4にぶい黄褐色 ローム主体

第8号土坑 (SK08) (A-A')

- 第1層 10YR2/1黒色 しまり・粘性やや弱、暗褐色(10YR3/4)の
粘土質土2%

第9号土坑 (SK09) (A-A')

- 第1層 10YR4/2灰黄褐色 ローム主体
- 第2層 10YR4/2灰黄褐色 ローム主体 明黄褐色(10YR6/6)粒
($\phi 2 \sim 3\text{mm}$) 1%
- 第3層 10YR4/3にぶい黄褐色 ローム主体
- 第4層 10YR4/2灰黄褐色 ローム主体
- 第5層 10YR4/2灰黄褐色 ローム主体 明黄褐色(10YR6/6)粒
($\phi 1 \sim 2\text{mm}$) 2%
- 第6層 10YR5/3にぶい黄褐色 ローム主体 赤褐色(5YR4/6)粒($\phi 1 \sim 2\text{mm}$) 2%
- 第7層 10YR4/2灰黄褐色 明黄褐色(10YR6/6)粒($\phi 3 \sim 5\text{mm}$) 10%、
炭化物10%
- 第8層 10YR4/3にぶい黄褐色 ローム主体 炭化物粒($\phi 1 \sim 2\text{mm}$) 1%
- 第9層 10YR6/6明黄褐色 ローム主体
- 第10層 10YR6/6明黄褐色 ローム主体 炭化物($\phi 1 \sim 2\text{mm}$) 2%
- 第11層 10YR4/2灰黄褐色 ローム主体 にぶい黄褐色(10YR6/4)粒
($\phi 2 \sim 3\text{mm}$) 2%、炭化物粒($\phi 1 \sim 2\text{mm}$) 10%
- 第12層 10YR4/4褐色 ローム主体
- 第13層 10YR5/4にぶい黄褐色 ローム主体 明黄褐色(10YR6/6)粒
($\phi 1 \sim 2\text{mm}$) 1%
- 第14層 10YR5/6黄褐色 ローム主体
- 第15層 10YR5/4にぶい黄褐色 ローム主体

第10号土坑 (SK10) (A-A')

- 第1層 10YR4/2灰黄褐色 炭化物少量混入
- 第2層 10YR4/3にぶい黄褐色 ローム主体
- 第3層 10YR4/6褐色 ローム主体
- 第4層 10YR5/6黄褐色 ローム主体
- 第5層 10YR5/4にぶい黄褐色 ローム主体
- 第6層 10YR6/6明黄褐色 ローム主体

図7 土坑(2)

2 溝状土坑

溝状土坑は7基検出した。令和4年度調査区の南側に集中している。遺構同士の重複や遺物が出土するものは確認できなかった。

第1号溝状土坑 (SV01、図8、写真5)

【位置・確認】令和4年度調査区、ⅢC・ⅢD-54グリッドに位置する。第Ⅳ層面、標高27.9mで確認した。

【重複】なし。

【規模】開口部長軸403cm、短軸39cm、底部長軸414cm、短軸9cmを測る。検出面からの深さは82cmで、底面は、ほぼ平坦に造られている。長軸断面形は箱形で、南北両端とも中～下位でややオーバーハングする。短軸断面形はV字状を呈している。長軸方向はN-12°-Wである。

【堆積土】5層に分層した。黒褐色土や黄褐色土を主体とした自然堆積の様相を呈している。最下層の第5層は砂質の褐色土である。

【出土遺物】遺物は出土していない。

【小結】これまでの類例と周辺遺跡の調査例から、縄文時代中期後葉以降に帰属する狩猟用の落とし穴と考えられる。

第2号溝状土坑 (SV02、図8、写真5・7)

【位置・確認】令和4年度調査区、ⅢC・ⅢD-50・51グリッドに位置する。第Ⅳ層面、標高27.7mで確認した。

【重複】なし。

【規模】開口部長軸430cm、短軸65cm、底部長軸406cm、短軸8cmを測る。検出面からの深さは107cmで、底面は、ほぼ平坦に造られている。長軸断面形は箱形で、北端は中～下位にかけてややオーバーハングし、南端は中位でオーバーハングし傾斜を持ちながら底面に向かっている。短軸断面形はY字状を呈している。長軸方向はN-8°-Wである。

【堆積土】3層に分層した。第1層には地山ブロックを含み、第2層は地山崩落土の可能性が高く、第3層は砂質の暗褐色土で、黄褐色の地山粒を含んでいる。自然堆積と思われる。

【出土遺物】遺物は出土していない。

【小結】これまでの類例と周辺遺跡の調査例から、縄文時代中期後葉以降に帰属する狩猟用の落とし穴と考えられる。

第3号溝状土坑 (SV03、図8、写真6・7)

【位置・確認】令和4年度調査区、ⅢC-50グリッドに位置する。第Ⅳ層面、標高27.6mで確認した。

【重複】なし。

【規模】開口部長軸292cm、短軸43cm、底部長軸273cm、短軸9cmを測る。検出面からの深さは62cmで、底面は凹凸があり両端が低くなる。全体的に西側に向かい傾斜している様子がうかがえる。長軸断面形は箱形で、東西両端底部より30cmほど上部でオーバーハングする。短軸断面形はV字状を呈して

いる。長軸方向は $N-81^{\circ}-W$ で全7基中、唯一東西方向に主軸を持つ。

〔堆積土〕3層に分層した。黒褐色土、黄褐色土、褐色土を主体とした自然堆積の様相を呈している。最下層の第3層には壁崩落に伴う地山ブロックを多量に含んでいて砂質である。

〔出土遺物〕遺物は出土していない。

〔小結〕これまでの類型と周辺遺跡の調査例から、縄文時代中期後葉以降に帰属する狩猟用の落とし穴と考えられる。

第4号溝状土坑（SV04、図8、写真6）

〔位置・確認〕令和4年度調査区、ⅢC・ⅢD-47・48グリッドに位置する。第Ⅳ層面、標高27.3mで確認した。

〔重複〕なし。

〔規模〕開口部長軸423cm、短軸48cm、底部長軸421cm、短軸8cmを測る。検出面からの深さは90cmで、底面は、ほぼ平坦に造られている。長軸断面形は袋形で、北側でオーバーハングする。短軸断面形はY字状を呈している。長軸方向は $N-23^{\circ}-W$ である。

〔堆積土〕4層に分層した。黒褐色土、暗褐色土、褐色土を主体とした自然堆積の様相を呈している。第1・2層中に壁崩落に伴う地山ブロックを含んでいる。

〔出土遺物〕遺物は出土していない。

〔小結〕これまでの類型と周辺遺跡の調査例から、縄文時代中期後葉以降に帰属する狩猟用の落とし穴と考えられる。

第5号溝状土坑（SV05、図8、写真6）

〔位置・確認〕令和4年度調査区、ⅢB・ⅢC-45グリッドに位置する。第Ⅳ層面、標高27.0mで確認した。

〔重複〕なし。

〔規模〕開口部長軸421cm、短軸56cm、底部長軸407cm、短軸8cmを測る。検出面からの深さは109cmで、底面は、ほぼ平坦に造られている。長軸断面形は箱形で、南側底部付近でややオーバーハングする。短軸断面形は緩いY字状を呈している。長軸方向は $N-1^{\circ}-W$ である。

〔堆積土〕4層に分層した。黒褐色土、黄褐色土、褐色土を主体とした自然堆積の様相を呈している。第1・3層中には壁崩落による地山をブロック状に含み第2・4層は壁崩落土を主体としている。

〔出土遺物〕遺物は出土していない。

〔小結〕これまでの類型と周辺遺跡の調査例から、縄文時代中期後葉以降に帰属する狩猟用の落とし穴と考えられる。

第6号溝状土坑（SV06、図8、写真6）

〔位置・確認〕令和4年度調査区、ⅢB・ⅢC-40グリッドに位置する。第Ⅳ層面、標高26.2mで確認した。

〔重複〕なし。

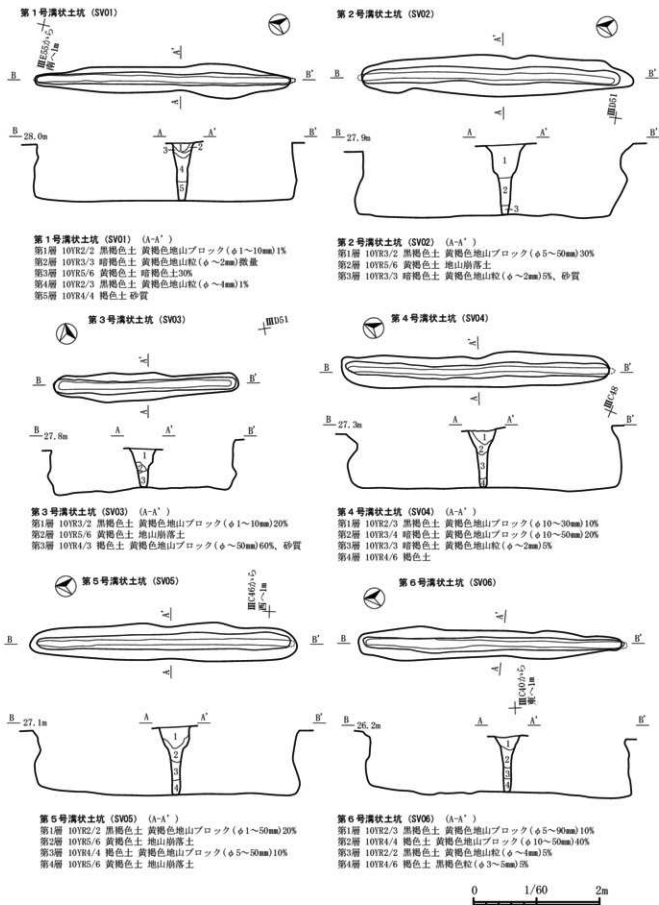


図8 溝状土坑(1)

〔規模〕 開口部長軸416 cm、短軸43 cm、底部長軸412 cm、短軸8 cmを測る。検出面からの深さは88 cmで、底面は北側でやや起伏があり南側が端部に向かい緩やかに傾斜している。長軸断面形は箱形で、南側底部付近でややオーバーハングする。短軸断面形はV字状を呈している。長軸方向はN-3°-Eである。

〔堆積土〕 4層に分層した。黒褐色土や褐色土を主体とした自然堆積の様相を呈している。第1～3層には第IV・V層由来の黄褐色ブロックや黄褐色粒を含んでいる。

〔出土遺物〕 遺物は出土していない。

〔小結〕 これまでの類例と周辺遺跡の調査例から、縄文時代中期後葉以降に帰属する狩猟用の落とし穴と考えられる。

第7号溝状土坑 (SV07、図9、写真7)

〔位置・確認〕 令和4年度調査区、ⅢA・ⅢB-38 グリッドに位置する。第IV層面、標高25.9 mで確認した。

〔重複〕 なし。

〔規模〕 開口部長軸406 cm、短軸87 cm、底部長軸388 cm、短軸9 cmを測る。検出面からの深さは104 cmで、底面は中央部でやや窪む以外は平坦に造られている。長軸断面形は箱形で、南側底部付近でややオーバーハングする。短軸断面形はY字状を呈している。長軸方向はN-2°-Eである。

〔堆積土〕 4層に分層した。黒褐色土、暗褐色土、黄褐色土を主体とした自然堆積の様相を呈している。第1層には壁崩落に伴う地山をブロック状に含み、第3層は地山崩落土の可能性が高い。最下層には全7基の中で唯一、黒色土が堆積する。

〔出土遺物〕 遺物は出土していない。

〔小結〕 これまでの類例と周辺遺跡の調査例から、縄文時代中期後葉以降に帰属する狩猟用の落とし穴と考えられる。

(笹森)

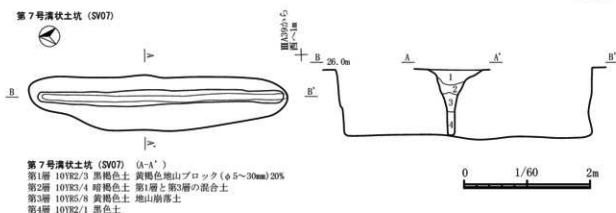


図9 溝状土坑(2)

3 溝跡

溝跡は1条、令和5年度調査区で検出した。

第1号溝跡 (SD01、図10、写真7)

〔位置・確認〕 令和5年度調査区、ⅢT-54グリッドに位置する。第Ⅱ層面、標高28.9mで確認した。調査区際、東壁面の観察では現在の水田耕作土直下から掘り込みが確認できた。

〔重複〕 なし。

〔平面形・規模〕 東側は調査区外に延びている。検出した全長は116cm。第Ⅱ層検出面での上面幅84cm、底面幅40cm、検出面からの深さは40cm、水田耕作土直下での上面幅120cm、深さは62cmを測る。現在の水田耕作土直下から第Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ層を掘り込んでいる。底面はほぼ平坦で、地形に沿って東から西に向かい、やや傾斜している。横断面形は逆台形状を呈している。

〔堆積土〕 2層に分層した。黒色・黒褐色土を主体とした自然堆積である。

〔出土遺物〕 遺物は出土していない。

〔小結〕 検出面から、近世以降の区画溝と思われる。

(中門)

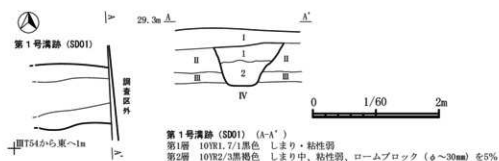


図10 溝跡

第4節 出土遺物

2か年にわたる発掘調査では石器、鉄滓、陶磁器片等、段ボール箱換算で1箱の遺物が、全て遺構外から出土した。

1 礫石器・礫（図11-1～3、写真8）

出土した石器は礫石器2点（1,206.9g）で、全て図示した。図11-1は台石・石皿（1,093.9g）である。欠損品で扁平な礫の2面を使用している。使用面は2面とも平滑で、1面には凹痕が1か所確認できる。縄文時代に帰属する可能性がある。素材は安山岩で調査区表採品である。図11-2は欠損品（113.0g）である。器種は不明で、厚さは1.2cmを測る。縦断面形は片刃状を呈し、鋭くはないが刃部の可能性がある。縄文時代に帰属する可能性が高い。素材は安山岩で、第I層から出土した。図11-3は被熱礫（19.6g）である。欠損品で帰属時期は不明だが平安時代の可能性がある。素材は安山岩で、第I層から出土した。

2 鉄滓（図11-4、写真8）

鉄滓が1点（100.4g）出土し図示した。図11-4は1/2程欠損しているが楕円鍛冶滓と思われる。断面観察から操業は1回と思われ、平安時代に帰属する可能性が高い。第II層から出土した。

3 陶磁器（図11-5～10、写真8）

陶磁器は6点（73.5g）出土し、全て図示した。第I層および第II層から出土した。図11-5は播鉢の体部片で、色調は器面・断面とも灰色を呈しており珠洲産の製品と思われる。鉤目と単位は不明瞭であるが溝幅2～3mmと比較的広めであることが残存部から確認できる。図11-6は播鉢の体部片で、鉤目は明瞭に残っているが単位は不明である。色調は器面・断面とも橙色を呈している。図11-7は磁器皿の底部片で、高台部が残っており、外面には2重の圈線が横位に上下2単位描かれている。肥前系染付皿と思われる。意図的に高台の一部と周縁を打ち欠いている可能性がある。図11-8は陶器鉢の口縁部片で、唐津系の三島手と思われる。図11-9は陶器碗の体部片で、内外面に釉薬が施されているが、産地等については不明である。図11-10は磁器皿の口縁部片で、内面に微塵唐草文様が描かれている。肥前系染付皿と思われる。

4 鉄製品（図11-11、写真8）

鉄製品は蹄鉄が1点（338.5g）、第I層から出土し図示した。図11-11は圧力によりかなり変形している。腐食による錆が全面を覆っているが、X線透過写真の観察からは鉄側左右それぞれに釘溝と7個の長方形の釘孔が確認できる。鉄頭及び鉄側に鉄髻はないが、鉄頭の左右に1辺1.2cm程で先端がやや窄まる方形と1辺1.0cm程の不整な三角形の突起が認められ、滑り止めの可能性がある。また、鉄尾は2か所共に折り曲がっている状況がX線透過写真から確認できた。現状での幅は最大18.5cm、長さは最大12.3cm、厚さは0.3cmを測る。農耕馬用の蹄鉄と思われる、大正期の可能性がある。

（佐森）

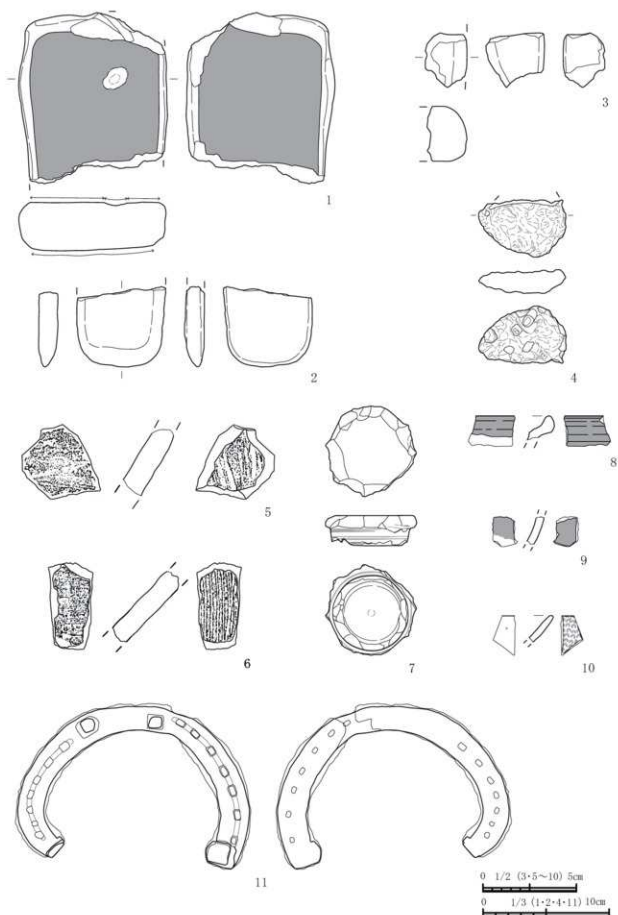


図 11 出土遺物

第4章 自然科学分析

第1節 放射性炭素年代 (AMS 測定)

(株) 加速器分析研究所

1 測定対象試料

林ノ後遺跡は、青森県上北郡横浜町字林ノ後、字中柁名木地内（北緯 41° 05' 12"、東経 141° 15' 29"）に所在し、標高 30 m 前後の段丘上に立地する。測定対象試料は、第 4 号土坑から出土した炭化物 2 点である（表 3）。

2 測定の意義

試料が出土した遺構やその周辺では遺物が出土していないため、炭化物の年代測定で遺構の年代を明らかにする。

3 化学処理工程

- (1) メス・ビンセットを使い、付着物、混入物を取り除き、必要量の試料を採取、乾燥させ、秤量する（表 1「処理前試料量」）。
- (2) 酸-アルカリ-酸 (AAA: Acid Alkali Acid) 処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させ、秤量する（表 1「処理後試料量」）。AAA 処理における酸処理では、通常 1 mol/l (1 M) の塩酸 (HCl) を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム (NaOH) 水溶液を用い、0.001 M から 1 M まで徐々に濃度を上げながら処理を行う。
- (3) 必要量を採取、秤量（表 1「燃焼量」）した試料を燃焼させ、二酸化炭素 (CO₂) を発生させる。
- (4) 真空ラインで二酸化炭素を精製、定量する。この二酸化炭素中の炭素相当量を算出する（表 1「精製炭素量」）。
- (5) 精製した二酸化炭素を鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト (C) を生成させる。
- (6) グラファイトを内径 1 mm のカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

表 1 試料の処理状況

測定番号	試料名	処理前試料量 (mg)	処理後試料量 (mg)	燃焼量 (mg)	精製炭素量 (mg)
IAAA-231748	炭サンプル 1	30.81	11.32	4.53	3.03
IAAA-231749	炭サンプル 2	37.95	27.01	4.42	3.11

4 測定方法

加速器をベースとした ¹³C-AMS 専用装置 (NEC 社製) を使用し、¹³C の計数、¹³C 濃度 (¹³C/¹²C)、¹³C 濃度 (¹³C/¹²C) の測定を行う。測定では、米国国立標準局 (NIST) から提供されたシュウ酸 (HOx II) を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。測定回数、¹³C カウント数、¹³C/¹²C 比を表 2 に示す。

表 2 試料の AMS 測定状況

測定番号	試料名	測定回数	^{14}C Count	$^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ (%)
IAAA-231748	炭サンプル 1	15	46056	1.0963
IAAA-231749	炭サンプル 2	15	44906	1.0929

5 算出方法

- (1) $\delta^{13}\text{C}$ は、試料炭素の ^{13}C 濃度 ($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$) を測定し、基準試料からのずれを千分偏差 (‰) で表した値である (表 3)。AMS 装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。
- (2) ^{14}C 年代 (Libby Age : yrBP, 表 3) は、過去の大気中 ^{14}C 濃度が一定であったと仮定して測定され、1950 年を基準年 (0yrBP) として遡る年代である。年代値の算出には、Libby の半減期 (5568 年) を使用し、 $\delta^{13}\text{C}$ によって同位体効果を補正する (Stuiver and Polach 1977)。 ^{14}C 年代と誤差は、下 1 桁を丸めて 10 年単位で表示される。また、 ^{14}C 年代の誤差 ($\pm 1\sigma$) は、試料の ^{14}C 年代がその誤差範囲に入る確率が 68.2%であることを意味する。
- (3) pMC (percent Modern Carbon) は、標準現代炭素に対する試料炭素の ^{14}C 濃度の割合である。pMC が小さい (^{14}C が少ない) ほど古い年代を示し、pMC が 100 以上 (^{14}C の量が標準現代炭素と同等以上) の場合 Modern とする。この値も $\delta^{13}\text{C}$ によって補正されている (表 3)。
- (4) 暦年較正年代 (または単に較正年代) とは、年代が既知の試料の ^{14}C 濃度をもとに描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の ^{14}C 濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、 ^{14}C 年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、1 標準偏差 ($1\sigma = 68.3\%$) あるいは 2 標準偏差 ($2\sigma = 95.4\%$) で表示される。グラフの縦軸が ^{14}C 年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は、 $\delta^{13}\text{C}$ 補正を行い、下 1 桁を丸めない ^{14}C 年代値である (表 4 の「暦年較正用 (yrBP)」。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal20 較正曲線 (Reimer et al.2020) を使い、OxCalv4.4 較正プログラム (Bronk Ramsey 2009) を使用した。暦年較正の結果を表 4 ($1\sigma \cdot 2\sigma$ 暦年代範囲) に示す。暦年較正年代は、 ^{14}C 年代に基づいて較正 (calibrate) された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」または「cal BP」という単位で表される。今後、較正曲線やプログラムが更新された場合、「暦年較正用 (yrBP)」の年代値を用いて較正し直すことが可能である。

6 測定結果

測定結果を表 3、4 に示す。

試料 2 点の ^{14}C 年代は、炭サンプル 1 が $12410 \pm 40\text{yrBP}$ 、炭サンプル 2 が $12390 \pm 40\text{yrBP}$ である。暦年較正年代 (2σ) は、炭サンプル 1 が $12916 \sim 12321\text{cal BC}$ ($14865 \sim 14270\text{cal BP}$) の範囲、炭サンプル 2 が $12894 \sim 12251\text{cal BC}$ ($14843 \sim 14200\text{cal BP}$) の間に 2 つの範囲で示され、2 点とも縄文時代草創期頃 (陸線土器の時期) に相当する (小林編 2008、小林 2017)。

試料の炭素含有率はいずれも 60%を超える十分な値で、化学処理、測定上の問題は認められない。

文献

Bronk Ramsey, C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, Radiocarbon 51(1), 337-360

小林謙一 2017 縄文時代の実年代 ―土器型式編年と炭素 14 年代―, 同成社

小林達雄編 2008 総覧縄文土器, 総覧縄文土器刊行委員会, アム・プロモーション

Reimer, P.J. et al. 2020 The IntCal20 Northern Hemisphere radiocarbon age calibration curve (0-55 cal kBP), Radiocarbon 62(4), 725-757

Stuiver, M. and Polach, H.A. 1977 Discussion: Reporting of ^{14}C data, Radiocarbon 19(3), 355-363

表3 放射性炭素年代測定結果 ($\delta^{13}\text{C}$ 、 ^{14}C 年代 (Libby Age)、pMC)

測定番号	試料名	採取場所	試料 形態	処理 方法	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) (AMS)	$\delta^{13}\text{C}$ 補正あり	
						Libby Age (yrBP)	pMC (%)
IAAA-231748	炭サンプル1	第4号土坑(SK04) 堆積土3層	炭化物	AAA	-25.33 $\pm$ 0.18	12,410 $\pm$ 40	21.33 $\pm$ 0.1
IAAA-231749	炭サンプル2	第4号土坑(SK04) 堆積土5層	炭化物	AAA	-28.40 $\pm$ 0.18	12,390 $\pm$ 40	21.40 $\pm$ 0.1

[IAA登録番号: #C374]

表4 放射性炭素年代測定結果 (暦年較正用 ^{14}C 年代、較正年代)

測定番号	試料名	暦年較正用 (yrBP)	較正条件	1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
IAAA-231748	炭サンプル1	12,413 $\pm$ 38	OxCal v4.4 IntCal20	12872calBC-12824calBC(8.2%) 12792calBC-12749calBC(6.9%) 12626calBC-12378calBC(53.1%)	12916calBC-12321calBC(95.4%)
IAAA-231749	炭サンプル2	12,385 $\pm$ 39	OxCal v4.4 IntCal20	12859calBC-12763calBC(18.7%) 12576calBC-12356calBC(49.6%)	12894calBC-12721calBC(26.1%) 12675calBC-12251calBC(69.4%)

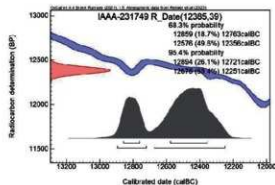
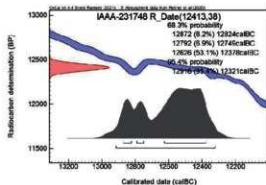


図1 暦年較正年代グラフ

第5章 総括

第1節 遺構と遺物から見た各時代の土地利用

1 縄文時代

縄文時代の所産と思われる遺物は第1層中及び調査区内で表採した礫石器2点だけであり、土器や剥片石器は出土していない。縄文時代と考えられる遺構は土坑8基（SK02～07・09・10）と溝状土坑7基（SV01～07）を検出したが、遺構内からの遺物の出土はなかった。

今回検出した土坑は平面形が不整形のものが多く、底面にはテラス状の段や傾斜、壁には急な立ち上がりや被熱部分を持つ特徴が確認できるものもある。第4号土坑（SK04）もその中の1基で、堆積土中の炭化物の放射性炭素年代測定結果からは縄文時代草創期の年代値が示されており（第4章第1節参照）、同時期の遺構の可能性が高いと推察される。しかしながら遺物を伴わず、定型的な類型も確認できないことから用途に関しても不明な点が多い。形態的には放射性炭素年代測定値からは時期的にやや下る縄文時代早期の炉穴に類似する遺構の可能性も考えられるが、明確な火床を伴わず判断材料に乏しい。第4号土坑以外では上層にシルト質土を含む第5号土坑（SK05）以外はロームを主体とした堆積土で、炭化物や焼土粒を含むものもあることから、第4号土坑とほぼ同時期の遺構の可能性が高いと推察されるが、こちらも遺物を伴わず用途に関しても不明な点が多い。

溝状土坑は前述のとおり、これまでの調査事例から狩猟用の落とし穴として利用され、帰属時期は縄文時代中期後葉から後期前葉にかけてと考えられている（福田 2018、藤原 2019）。第2章第1節でも記したが、横浜町においても国道279号横浜北バイパスや同南バイパス建設事業等に伴い、これまでに複数遺跡の発掘調査で溝状土坑を検出している。今回の調査区でもそれらの遺跡と同様、縄文時代の一時期、狩猟場の一部であったものと思われる。溝状土坑は7基検出し、6基（SV01・02・04～07）の長軸は等高線に沿った南北軸、1基（SV03）の長軸は直交した東西軸を示す状況が確認できた。また、規模は等高線に沿う6基の全長平均が400 cmを超えるのに対し、直交する1基は全長300 cm弱で100 cm以上の差、深さも前者の平均が97 cmであるのに対し、後者が62 cmで30 cm以上の差を確認した。これら7基の規模の相違や検出状況は、溝状土坑の構築・使用・廃絶の時間差や配置・利用状況、また、動物が利用していたと考えられる水場からは比較的離れた段丘上での狩猟活動を考察するうえでも重要な事例といえる。

2 古代

古代、特に平安時代は、周辺区域で人々の行動が活発になった時期であるが、今回の調査区からは同時代の所産と考えられる鉄滓が1点と可能性のある被熱礫が1点出土したのみで、堅穴建物跡や土師器・須恵器等は見つかっていない。本遺跡の南側で営まれていた平安時代の集落である林ノ脇遺跡からは直線距離で北へ250 mほど離れた地点であり、途中には小河川も存在しており、利便性の面からも土地の利用頻度は、それほど高くなかったものと推察される。林ノ脇遺跡の発掘調査でも同遺跡の南端から北側に向かうにしたがい遺構・遺物数が少なくなる傾向が確認でき、集落を区画する第18号溝跡を境にして、その外（北）側から古代の遺構は、試掘・確認調査でも検出されていない（青

教委 2022b)。

3 中世

14～15世紀の珠洲産と思われる播鉢片が1点出土しているが、遺構は検出されていない。横浜町には中世城館が数か所所在しているが、本遺跡は、それらからも直線距離で約800～5,000mとかなり離れた地点に位置している。出土遺物も少なく関連する遺構も検出されていないことから人々の行動痕跡も少なかった可能性が高い。

4 近世以降

肥前IV～V期の所産を含む陶磁器片が5点と近代の蹄鉄が1点出土しているが、近世以降と思われる遺構は詳細不明を含む土坑2基(SK01・08)と地境を形成すると考えられる溝跡1条(SD01)を検出したのみである。今回の調査区は、近世街道の田名部道から東へ1,000mほど離れた地点に位置している。現在、海岸線から離れた丘陵地で営まれる畑地や牧草地は、大正から戦後にかけて行われた開拓によるものが多いとされている。今回の調査区において、開拓以前の土地利用があったとしても小規模な田畑耕作に限られていた可能性は高い。出土した蹄鉄は比較的大型で滑り止め用と思われる突起が認められる。全国的に見ても農耕馬に蹄鉄が用いられたのは大正期以降とされており、この地で開拓が行われた頃とも整合する。

5 土地利用の様相

林ノ後遺跡の2か年の調査で検出した遺構や出土遺物から各時代の土地利用状況について概観した。当該区域では縄文時代草創期に人々による何らかの土地利用が確認され、その後、狩猟場に利用されていたと考えられる縄文時代中～後期以降、特に古代以降は人々の行動や土地利用の痕跡が希薄になる傾向が確認できた。しかしながら、古代、中世、近世以降の遺構掘削深度や田畑の耕作深度が、今回の遺構検出面まで及ばなかった可能性を全て否定するものではない。林ノ後遺跡の発掘調査は今後も予定されており、新たな遺構の検出や遺物の出土が期待される。

(佐森)

引用・参考文献

- 青森県教育委員会 1973『むつ小川町開発予定地内埋蔵文化財分布調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書 第1集
- 青森県教育委員会 1980『長七谷地貝塚』青森県埋蔵文化財調査報告書 第57集
- 青森県教育委員会 1982『安永沢遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書 第67集
- 青森県教育委員会 1983『青森県の中世城館』
- 青森県教育委員会 1996『田名部道』青森県「歴史の道」調査報告書
- 青森県教育委員会 1989『安永沢(1)遺跡Ⅳ』青森県埋蔵文化財調査報告書 第120集
- 青森県教育委員会 1991『青森県遺跡詳細分布調査報告書Ⅴ』青森県埋蔵文化財調査報告書 第165集
- 青森県教育委員会 1999『鶴引遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書 第265集
- 青森県教育委員会 2000『マダシ平遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書 第271集
- 青森県教育委員会 2002『野辺地蟹田(16)遺跡、向田(30)・(31)遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書 第319集
- 青森県教育委員会 2008a『坪毛沢(1)遺跡Ⅱ 梁山(1)遺跡Ⅱ 大坊頭遺跡 赤平(1)遺跡 赤平(2)遺跡Ⅱ』青森県埋蔵文化財調査報告書 第149集
- 青森県教育委員会 2008b『存屋敷平遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書 第450集
- 青森県教育委員会 2008c『原屋敷久保(1)遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書 第453集
- 青森県教育委員会 2014『鬼川辺(1)遺跡・鬼川辺(2)遺跡・鬼川辺(3)遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書 第541集
- 青森県教育委員会 2018『滑石(2)遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書 第595集
- 青森県教育委員会 2020『陶屋(1)遺跡Ⅱ』青森県埋蔵文化財調査報告書 第610集

- 青森県教育委員会 2021a『林ノ後遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書 第620集
 青森県教育委員会 2021b『百目木(3)遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書 第622集
 青森県教育委員会 2022a『秋越(2)遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書 第628集
 青森県教育委員会 2022b『青森県遺跡詳細分布調査報告書34』青森県埋蔵文化財調査報告書 第632集
 青森県教育委員会 2023a『林ノ後遺跡Ⅱ』青森県埋蔵文化財調査報告書 第633集
 青森県教育委員会 2023b『林ノ後遺跡Ⅲ』青森県埋蔵文化財調査報告書 第634集
 横浜町史編纂委員会 1982『横浜町郷土史年表』
 横浜町教育委員会 1983『松木遺跡発掘調査報告書』
 財団法人京都市文化財センター 2004『京都市山田橋大台遺跡』財団法人京都市文化財センター調査報告書第88集
 鹿角扇三・渡辺兼雄 1980『鹿角扇三 蒐集考古学資料集』
 福田友之・工藤清孝・木村浩一 1986『南部町聖寿寺跡・十和田町三日月市跡・横浜町牛ノ沢館跡等発見の陶磁器類』『弘前大学考古学研究』3
 佐藤宏之 2001『縄紋時代の陥し穴』考古学ジャーナルNo.468
 瀬川 浩 2006『むつ湾東岸域に所在する製塩釜跡』
 福田友之 2018『東北北部先史文化の考古学』同成社
 今村尊賢 2019『総論 陥し穴研究の展開』月刊考古学ジャーナル12月号
 藤原孝樹 2019『日本の動物相と陥し穴』考古学ジャーナルNo.734
 九州近世陶磁学会 2000『九州陶磁の百年—九州近世陶磁学会10周年記念—』

表2 土坑(SK)計測表

図番号	遺構名	出土位置	確認面	底面	主軸方向	上端 (cm)		深さ (cm)	備考
						長軸	短軸		
図6 SK01	ⅢV-52グリッド	第IV層面	第IV層	—	—	112	84	20	
図6 SK02	ⅢV-46グリッド	第IV層面	第IV層	—	—	210	105	26	
図6 SK03	ⅢB-42グリッド	第IV層面	第IV層	—	—	—	102	22	
図6 SK04	ⅢV-45グリッド	第IV層面	第IV層	—	—	118	104	36	放射性炭素年代測定：第4章第1節
図6 SK05	ⅢV-48グリッド	第IV層面	第V層	—	—	250	180	65	
図7 SK06	ⅢV-41グリッド	第IV層面	第IV層	—	—	178	138	32	
図7 SK07	ⅢV-44グリッド	第IV層面	第IV層	—	—	105	86	17	
図7 SK08	ⅣB-40グリッド	第II層面	第II層	—	—	136	—	38	
図7 SK09	ⅢV-43-44グリッド	第IV層面	第IV層	—	—	238	118	23	
図7 SK10	ⅢV-4A-39グリッド	第IV層面	第IV層	—	—	114	64	24	

表3 溝状土坑(SV)計測表

図番号	遺構名	出土位置	確認面	底面	主軸方向	上端 (cm)		下端 (cm)		深さ (cm)	備考
						長軸	短軸	長軸	短軸		
図8 SV01	ⅢC-ⅢD-54グリッド	第IV層面	第IV層	N-12°-W	—	403	39	414	9	82	
図8 SV02	ⅢC-ⅢD-50-51グリッド	第IV層面	第IV～V層	N-8°-W	—	430	65	406	8	107	
図8 SV03	ⅢC-50グリッド	第IV層面	第IV層	N-81°-W	—	292	43	273	9	62	
図8 SV04	ⅢC-ⅢD-47-48グリッド	第IV層面	第IV層	N-23°-W	—	423	48	421	8	90	
図8 SV05	ⅢB-ⅢC-45グリッド	第IV層面	第IV～V層	N-1°-W	—	421	56	407	8	109	
図8 SV06	ⅢB-ⅢC-40グリッド	第IV層面	第IV～V層	N-3°-E	—	416	43	412	8	88	
図9 SV07	ⅢA-ⅢB-38グリッド	第IV層面	第IV～V層	N-2°-E	—	406	87	388	9	104	

表4 溝跡(SD)計測表

図番号	遺構名	出土位置	確認面	底面	主軸方向	長さ (cm)	上端 (cm)	下端 (cm)	深さ (cm)	備考
							幅	幅		
図10 SD01	ⅢV-54グリッド	第II層面	第IV層	—	(116)	130(本図照片上端下 部は後述参照)	—	40	—	和(本図照片上端下 部は後述参照)

表5 礫石器・礫観察表

図番号	出土位置	層位	遺物番号	種別	器種	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考
図11-1	R5調査区南東部	表様	S-X	礫石器	台石・石皿	安山岩	(13.5)	11.8	3.9	(1093.9)	一部欠損：平滑2面・凹痕1面
図11-2	R5調査区南東部	第1層	S-X	礫石器	刃器?	安山岩	(6.8)	7.1	1.6	(113.0)	欠損品
図11-3	R5調査区南東部	第1層	S-X	礫	—	安山岩	(1.9)	(2.2)	(3.1)	(19.6)	欠損品：被焼礫

表6 陶磁器観察表

図番号	出土位置	層位	遺物番号	種別	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考
図11-5	R5調査区南東部	第II層	P-X	陶器	播鉢	(3.0)	(4.5)	2.0	(18.2)	珠洲：体部片
図11-6	ⅢB-39グリッド	表土	P-X	陶器	播鉢	(4.6)	(2.3)	1.1	(16.7)	体部片
図11-7	ⅢD-45グリッド	表土	P-X	磁器	皿	(4.8)	(4.8)	1.6	(33.5)	肥前Ⅳ～V層：底部高台片
図11-8	R5調査区南東部	第1層	P-X	陶器	鉢	(1.6)	(2.5)	0.7	(3.2)	唐津系：口縁部片・三島手
図11-9	ⅢV-51グリッド	表土	P-X	陶器	碗	(1.6)	(1.2)	0.4	(0.9)	体部片・内外面施釉
図11-10	ⅢD-43グリッド	表土	P-X	磁器	皿	(2.1)	(1.0)	0.4	(1.0)	肥前Ⅳ層：口縁部片・内面微痕唐文様

表7 鉄滓・鉄製品観察表

図番号	出土位置	層位	遺物番号	種別	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	磁着度	メタル度	備考
図11-4	R5調査区南東部	第II層	P-X	鉄滓	(4.5)	6.9	1.9	(100.4)	12	Ⅲ(C)	欠損品：輪形鉄滓
図11-11	R5調査区南東部	第1層	P-X	鉄滓	12.3	18.5	0.3	238.5	—	—	右に2つの穴と縦溝と見られる7割の欠品・骨片との埋蔵



遺跡全景 令和4年度調査区南側（西→）



遺跡全景 令和5年度調査区（東→）

写真1 遺跡全景



基本土層 令和4年度調査区（東→）



基本土層 令和5年度調査区（西→）

写真2 基本土層



SK01 土層断面 (東→)



SK01 完掘 (東→)



SK02 土層断面 (南西→)



SK02 完掘 (南西→)



SK03 土層断面 (東→)



SK03 完掘 (東→)



SK04 土層断面 (南東→)



SK04 完掘 (南東→)

写真3 土坑 (1)



SK05 土層断面 (西→)



SK05 完掘 (西→)



SK06 土層断面 (東→)



SK06 完掘 (東→)



SK07 土層断面 (南西→)



SK07 完掘 (西→)



SK08 土層断面 (南→)



SK08 完掘 (南→)

写真4 土坑(2)



SK09 土層断面 (南→)



SK09 完掘 (南→)



SK10 土層断面 (南→)



SK10 完掘 (南→)



SV01 土層断面 (南→)



SV01 完掘 (南→)



SV02 完掘 (南→)



SV02 土層断面 (南→)

写真 5 土坑 (3)・溝状土坑 (1)



SV03 土層断面 (東→)



SV04 土層断面 (南→)



SV05 土層断面 (南→)



SV06 土層断面 (南→)



SV03 完掘 (西→)



SV05 完掘 (南→)



SV04 完掘 (南→)



SV06 完掘 (南→)

写真6 溝状土坑 (2)



SV07 土層断面 (北→)



SV07 完掘 (北→)



SV02・SV03 完掘 (西→)



SD01 検出 (西→)



SD01 土層断面・完掘 (西→)

写真7 溝状土坑(3)・溝跡



図 11-1



図 11-2



図 11-5



図 11-6



図 11-7



図 11-3



図 11-4



図 11-8



図 11-9



図 11-10



図 11-11

写真 8 出土遺物

報告書抄録

ふりがな	はやしのうしろいせき							
書 名	林ノ後遺跡							
副 書 名	国道 279 号横浜北バイパス道路改築事業に伴う遺跡発掘調査報告							
シリーズ名	青森県埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第648集							
編 著 者 名	笹森一朗・中門亮太・葛城和徳							
編 集 機 関	青森県埋蔵文化財調査センター							
所 在 地	〒038-0042 青森県青森市大字新城字天田内152-15 TEL. 017-788-5701							
発 行 機 関	青森県教育委員会							
発行年月日	2025年3月12日							
ふりがな	ふりがな	コード		世界測地系 (JGD2011)		調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	北 緯	東 経		m ²	
はやしのうしろいせき 林ノ後遺跡	青森県上北郡 横浜町字林ノ後、 字中根名木地内	02406	406031	41°	141°	20220601 ～ 20220729	4,769	記録保存調査
				05°	15°	20230901 ～ 20231013		
				12°	29°			
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
林ノ後遺跡	散布地 狩猟場	縄文時代		土坑 溝状土坑		8 7 礫石器		土坑内から出土した炭化物の放射性炭素年代測定結果は縄文時代草創期頃の値を示す。縄文時代の一時期、狩猟場として利用されていた。
	散布地	古代以降	土坑 溝跡	1 1		桶形鋸治滓 被熱礫 陶磁器片		
		詳細不明	土坑	1		蹄鉄		
要 約								
林ノ後遺跡は、西方に陸奥湾を望む標高約 26 ～ 29 m の段丘上に立地する縄文時代と古代以降の複合遺跡である。 調査では縄文時代と思われる土坑 8 基、溝状土坑 7 基を検出した。遺物は出土していないが、第 4 号土坑堆積土中から出土した炭化物の放射性炭素年代測定結果からは縄文時代草創期頃の年代値が示された。落とし穴と考えられる溝状土坑 7 基の内 6 基は主軸方向が等高線に沿って、1 基は直交している状況が確認できた。また、規模も等高線に沿う 6 基の全長平均が 400 cm を超えるのに対し直交する 1 基は 300 cm 弱で、深さも前者の平均が 97 cm に対し後者は 62 cm とかなり浅く、溝状土坑の構築・使用・廃絶の時間差や配置・利用状況を考察するうえで重要な検出事例といえる。 古代以降では詳細不明を含む土坑 2 基、溝跡 1 条を検出したが、遺構内からの遺物の出土もなく、人々の行動や土地利用の痕跡が希薄になる傾向が確認できた。								

青森県埋蔵文化財調査報告書 第648集

林ノ後遺跡

—国道 279 号横浜北バイパス道路改築事業に伴う遺跡発掘調査報告—

発行年月日 2025年3月12日

発行 青森県教育委員会

編集 青森県埋蔵文化財調査センター

〒038-0042 青森県青森市大字新城字天田内152-15

TEL 017-788-5701 FAX 017-788-5702

印刷 株式会社 こがわ

〒030-0142 青森県青森市大字野木字野尻37-91

TEL 017-752-0072 FAX 017-752-0073

この印刷物は300部作成し、印刷経費は1部あたり2,035円(うち県負担916円)です。